

時事叢書

第二十四編

292  
9

土耳其及土耳其人

著 長瀬 鳳輔



~~292~~  
~~9~~



始



69

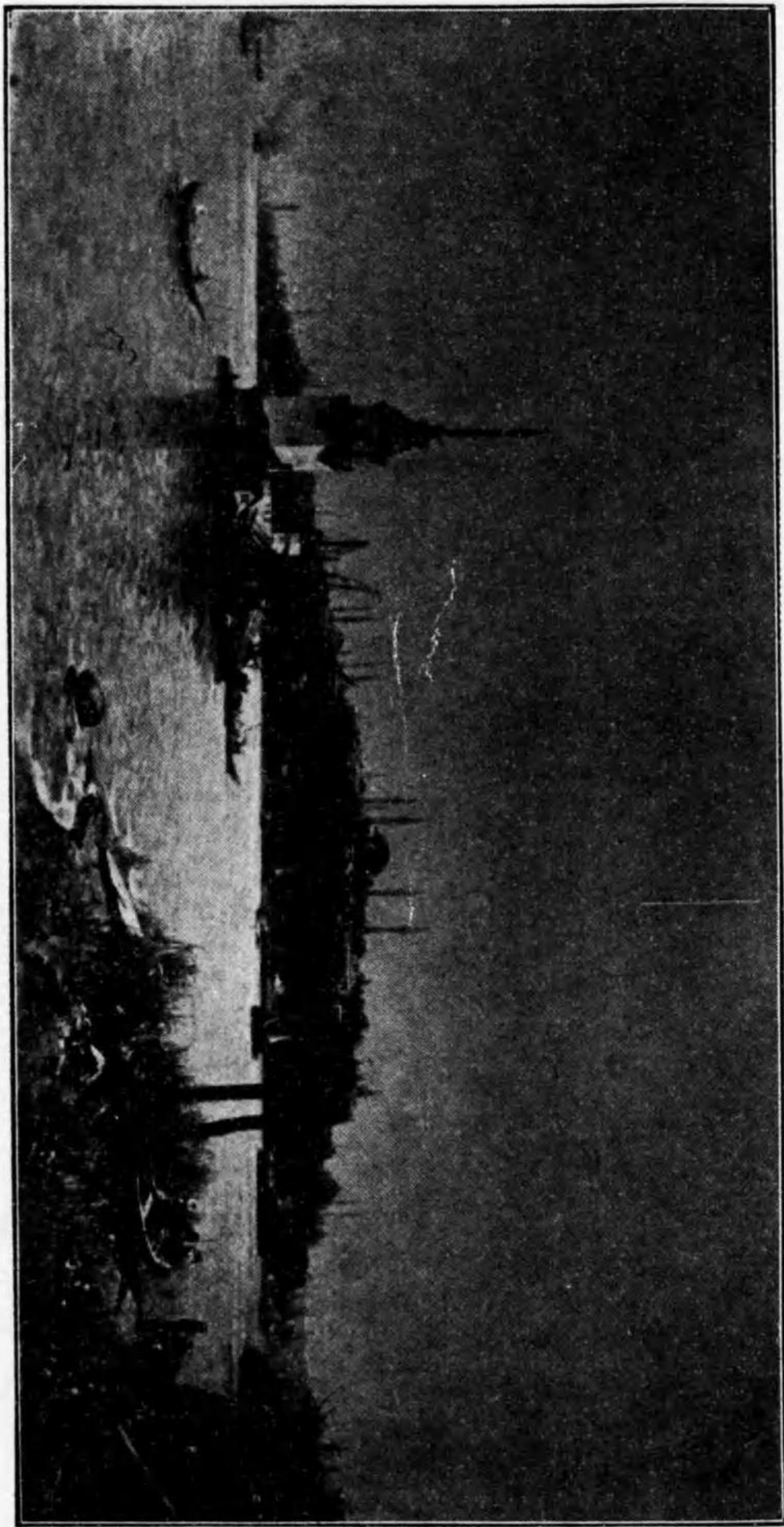
# 人古耳土及古耳土

一一

著輔鳳瀬長 ル ト ク ド  
ー エ ヒ フ ツ ロ イ フ

京 東  
行 發 房 山 富

景風ルブアーノチンタスニコ 筆授教ンマツルサ



15154



a ~~292~~  
a 292  
9

15154

## 土耳其及土耳其人

### 小序

噫、憐れなる土耳其は遂に蹶起して歐洲戰亂の渦中に投じた。是れ洵にその國家の存亡を賭したる冒險的行動であると謂はねばならぬ。蓋し不幸にして若し土耳其が一敗地に塗みれ、復た起つ能はざるに至らば、さなきだに『瀕死の病人』を以て目せらるゝ阿士曼帝國オスマンは、忽にして土崩瓦解し、竟に滅亡の悲境に陥いることなきを保せぬのである。想うて茲に到れば吾人は土耳其の前途の爲めに轉た寒心に堪へぬのである。

翻つて又考ふるに、土耳其は既往數世紀間、東西兩洋の觸接點に占據し、西力東漸の防波堤たるの役目を盡くし、又一方世界に散在する二億數千萬の回教徒の

爲めに唯一の支障地として存在し來たつたのである。されば一朝此の所謂防波堤にして決潰し、支障地にして破壊せられたりたりとせん乎、その影響の東洋並に回教國民に及ぼすの至大なる固より論を待たぬのである。

たとへ土耳其の存亡は、我が國民をして何等直接の利害痛痒を感ぜしめざるとするも、吾人は世界の太勢に鑑み、大に世人の考慮を要すべき問題であると思ふ。仍りて今茲に『土耳其及土耳其人』と題し、その國情の一斑を序述し、聊か世人の研究資料に供せんと欲するのである。されど斯かる小冊子を以て、その完璧を期することは固より不可能である。故に讀者若し之を諒とし、深く杜撰孟浪の罪を咎むること無くば、著者に取り望外の幸福である。

大正三年十二月下旬

著者識す

# 土耳其及土耳其人目次

## 第一編 歴史的觀察

- 一 阿士曼帝國の起源及び變遷……………一
- 二 青年土耳其黨の革命運動……………一四
- 三 巴爾幹戰爭と土國の現状……………三六

## 第二編 地理的觀察

- 一 一般地理的概観……………四
- 二 土耳其の住民……………五三

目次

一

三 地誌一斑

- (1) 小亞細亞…………… 五
- (2) 土領アルメニヤ及びクルヂスタン…………… 六
- (3) メソポタミヤ…………… 六
- (4) シリヤ及びバレスチナ…………… 七
- (5) 土領阿刺比亞…………… 七
- (6) 首府コンスタンチノーブル…………… 七

第二編 民族的觀察

- 一 民族性…………… 六
- 二 風俗習慣…………… 六

第四編 政治的觀察

- 一 政體及び中央政府…………… 九
- 二 財政…………… 一〇
- 三 地方制度…………… 一〇
- 四 司法制度…………… 一三

第五編 結論

- 一 日本と土耳其…………… 一六

目次終

土耳其及土耳其人

ドクトル・フィロソフ・エー 長瀬鳳輔著

第一編 歴史的觀察

一 阿士曼帝國の起源及び變遷

凡そ一國の現狀を明かにせんと欲せば、勢ひ過去に溯りて、その史的變遷を究むるの必要がある。

抑も土耳其民族の祖先は、太古中央亞細亞の平原に遊牧し、馬上生活を營んで

第一編 歴史的觀察

一

居た支那人の所謂匈奴の一族である。その事蹟の始めて世界の史上に現はるゝに至つたのは、西暦紀元後第五世紀の事であるが、突厥の名を以て支那史上に記されたるものが即ち是なのである。而してその名の起源に就て傳ふる所のものに據れば、紀元後四百三十三年の頃、阿史那と稱する匈奴の一支族が魏朝の治下に立つを嫌ひ、現今の甘肅省山丹附近に移りて、同じく匈奴の一族なる柔然の保護を受け、その鐵工と爲りて働いて居たが、その近傍に兜の形をしたる金山があつて土人は之を突厥と呼んで居たので、遂にその部族の名となるに至つたのであると云ふ。その後約百年を経て右の突厥即ち土耳其族は大に勢力を張り、遂に柔然を亡ぼし、他の匈奴族をも征服して、中央亞細亞の地に一大帝國を建立した。但し帝國と云つた所で、素より整然たる國家的機關を具へて居たのでは無いが、その君長は可汗の尊稱を用ゐ、殆んど皇帝同様の權力を有し、東は今の山東省邊から朝鮮

にかけ、西は波斯より東羅馬帝國にかけてその武威を振ひ、東羅馬皇帝の如きは款を通じて、波斯との戦争にその援助を求めた程であつた。然るに、第七世紀に入り、東西の二部に分れてより、漸く衰頹の兆を示すに至つたのだ。會々此の時に方り、モハメッド阿刺比亞に出で、イスラム教を創立し、その信徒等は新教宣傳の爲めに、所謂神聖軍なるものを起して先づ波斯を平定し、次でその北方なるトランスオキシアナ即ち今の露領土耳其斯坦に侵入し、第八世紀の初に至りて悉く之を征服し、更に又東方に進みて有ゆる土耳其族の住地を蹂躪した。此の結果土耳其族は次第に「モハメッド」教に改宗し、而も阿刺比亞人の勢權の下に屈從するに至つた。然るに其後紀元一千年頃、彼等は再び活動を開始し、阿富汗斯坦の北東に「ガスニー」朝を建立したるマームードは屢々西方印度に侵入し、遂にその後繼者は殆ん

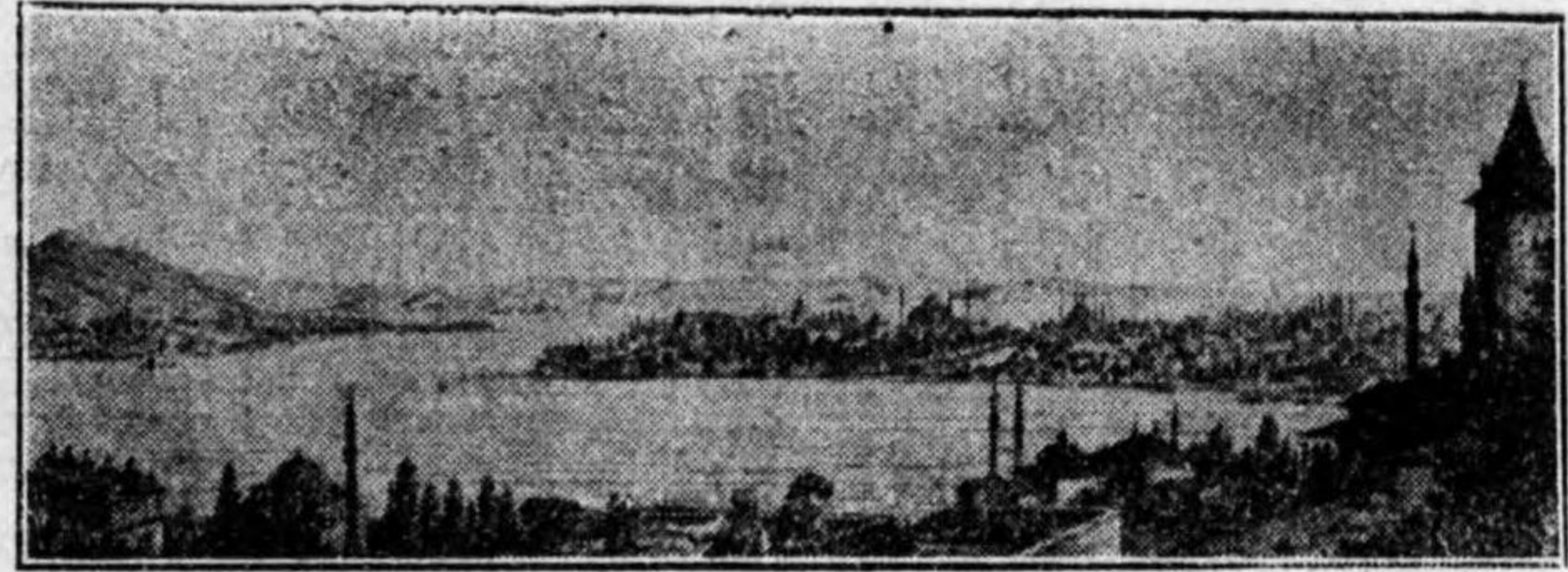


印度の全部を征服した。又一方西南に向ひたるセルジュックなる者を、その君長に戴ける土耳其族は、波斯を侵略したる後、小亞細亞並にシリヤを占領して茲に強大なるセルジュック朝を起した。又その一支族は遙かに南の方埃及を征服し、爾來マメルツク族の名を取りてその地を支配するに至つた。斯くの如くにして西南亞細亞の地は全く土耳其族の手に歸し、之が爲め東羅馬帝國は著しくその版圖を縮削せられた。彼の歐洲基督教國が屢々十字軍を起して、聖地エルサレムの回復を圖りたるも、常に失敗に終りたるは、實に此の時の事であつた。

斯くの如く西土耳其族が西方に於て飛躍を試みつゝ、あつた間に、成吉思汗が蒙古に起つて一大帝國を建立したるが爲め、東土耳其族は中央亞細亞より驅逐せられて、西方に移るの已むを得ざるに至つた。斯くて千二百三十年頃約五萬の土耳其族は、コラサン(波斯の北方)地方より君長スライマンに率ゐられて小亞細亞に移

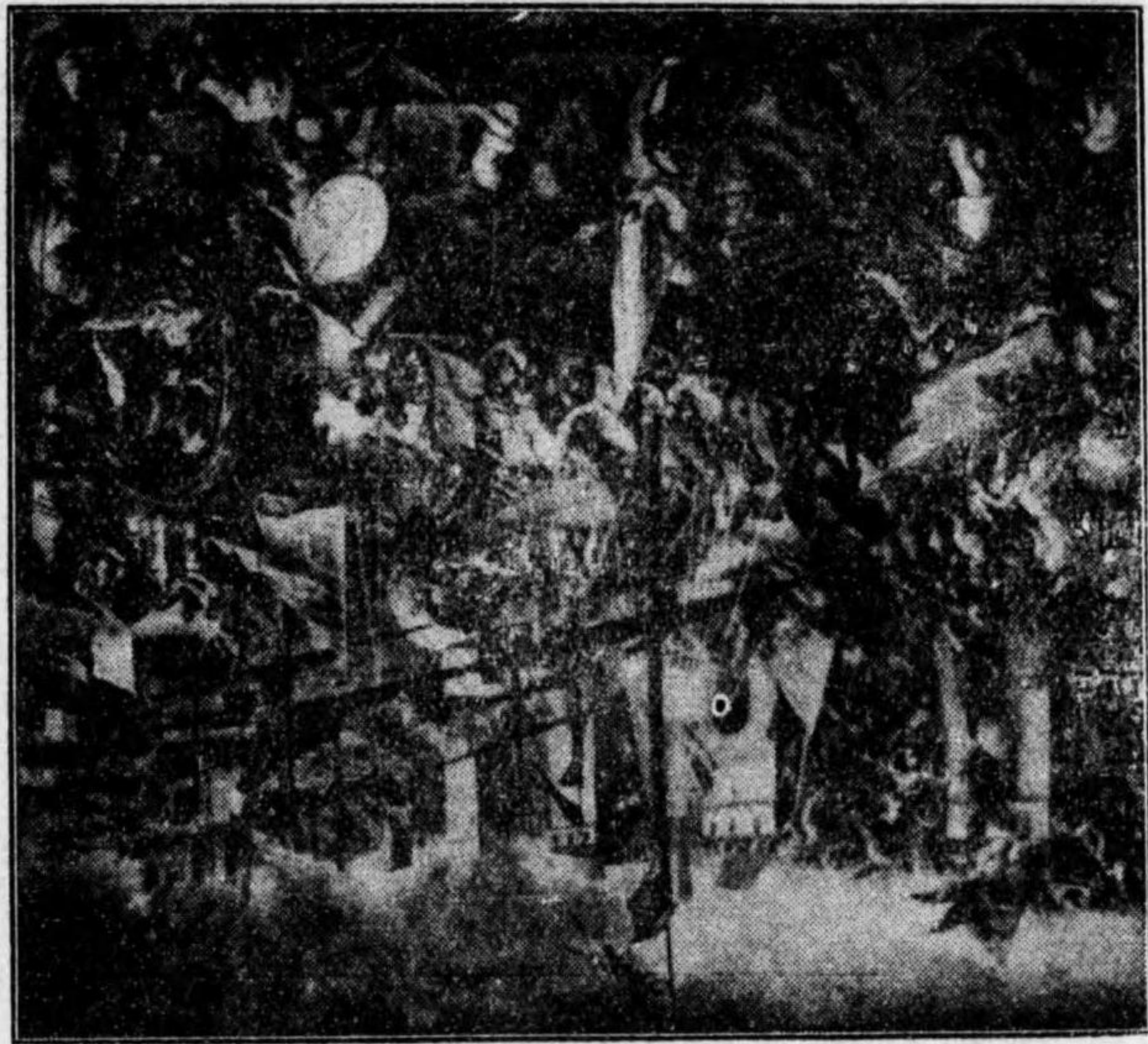
り、セルジュック朝に仕へて大に忠勤を盡した。而してスライマンの子エルトルール大に同族の勢力を發展し、更にその子オスマン、セルジュック朝に代りてその主權を握り、スルタンの尊稱を用ゐ、首府をブルツサに奠めた。是れぞ今のオスマン帝國の起源であるが、その部下の土耳其族は彼の名を取り自らオスマンリと稱し、(一に又オットマンとも呼ぶが、それは佛蘭西語に轉訛したのである)普通オスマン土耳其族として知らるゝに至つた。

然るに彼等は小亞細亞の地のみを以て満足せず、千三百三十七年ダルダネルス海峡を越えて歐洲に渡り、先づガリポリスを略取し、進んでトラキヤを平げ、千三百六十一年、アドリアノールを陥れて首府を此の地に遷した。越えて千三百八十九年、有名なるアムゼルフェルド(今のコツソヴオ・ポリエ)の決戦に於て塞爾比軍を破り、遂にその王國を滅ぼし、更に三年後、勃牙利王國をも併呑した。



府ルプーノチンタスノマの紀世八十

是に於て巴爾幹半島は殆ど全く土耳其の手に歸し、尙コンスタンチノールブルに據りて、その殘骸を守る東羅馬帝國は風前の燈と異ならざるの状態となつた。然るに會々此時東方に一大強敵帖木兒通稱タメルラン出現し、西南亞細亞の地は忽ちにしてその馬蹄の下に蹂躪する所となつた。仍つて土帝バヤジットはその急報に接し、直に軍を小亞細亞に還し、敵を要撃せんとしたるも、アンゴラの戰に一敗地に塗みれ、憐れ敵の捕虜となつた。時は是れ千四百二年の事であつたが、此の結果阿士曼帝國は土崩瓦解し、將に滅亡の悲境に陥らんとした。然るにその後五十年を経て、土國中興の英主モハメッド二世の立つや、忽ちにして



圖古の落陷ルプーノチンタスノマ年三五四一

國運を挽回し、遂に千四百五十二年の五月、コンスタンチノールを陥れて東羅馬帝國を亡し、爾來此の市を以て帝都とし、スタンブール即ちスルタンの都と改稱した。是より後オスマン土耳其族の勢力は隆々として旭日の天に冲するが如く、新月旗の向ふ所天下に敵前なく、已にモハメッド二世の時、巴爾幹半島の全部は勿論、クリミヤ半島

より匈牙利に至るの地を併呑し、世界屈指の一大強國となつた。而してその後繼セリム一世及びソリマン一世の治世間に於て益々隆盛に赴き、著しくその版圖



モハメド二世 (畫) (筆のニ)

更に又千五百二十六年匈牙利を併合し、屢々維也納附近迄前進し、千五百三十八年には印度遠征を企圖し、更に又千五百五十年には支那に向つても之を試みると

を擴大した。即ち千五百十四年波斯と戦うて之に克ち、アゼルバイジャン、クルヂスタン及びメソポタミヤの地を席卷し、千五百十六年にはシリヤを平げ、翌年埃及を征服して回教々主の位を奪ひ、その寶物をカイロより君府に移した。

した。又一方地中海に於けるロードス、キプルス、クリート、モルタ島の諸島は相前後して土耳其の領有する所となり、北アフリカに於けるトリポリス、チュニス及びアルゼリヤの諸回教國も亦土帝をその教主として戴くに至つた。是に於てその領域北は匈牙利のブタペストより南は阿刺比亞のメツカに至り、東はバグダッドより西はアルゼリヤに達し、多惱、ユーフラート、チグリス、ナイル等の諸大河は皆その領内に流れ、紅海、黒海、裏海及び地中海の東半部はその帝國の内海と爲り、その廣袤實に約六百萬平方吉米に達した。斯くてその全盛を極めたること百十年間の長きに亙り、その威力は遙かに印度洋中よりジャバ、スマトラ諸島に及ぼし、支那に於ける約三千萬の回教徒は土帝を以てその教主として戴き、忠誠を表するに至つた。

然るに驕る平家は久しからずの諺の如く、一度び千六百八十三年維也納の攻圍

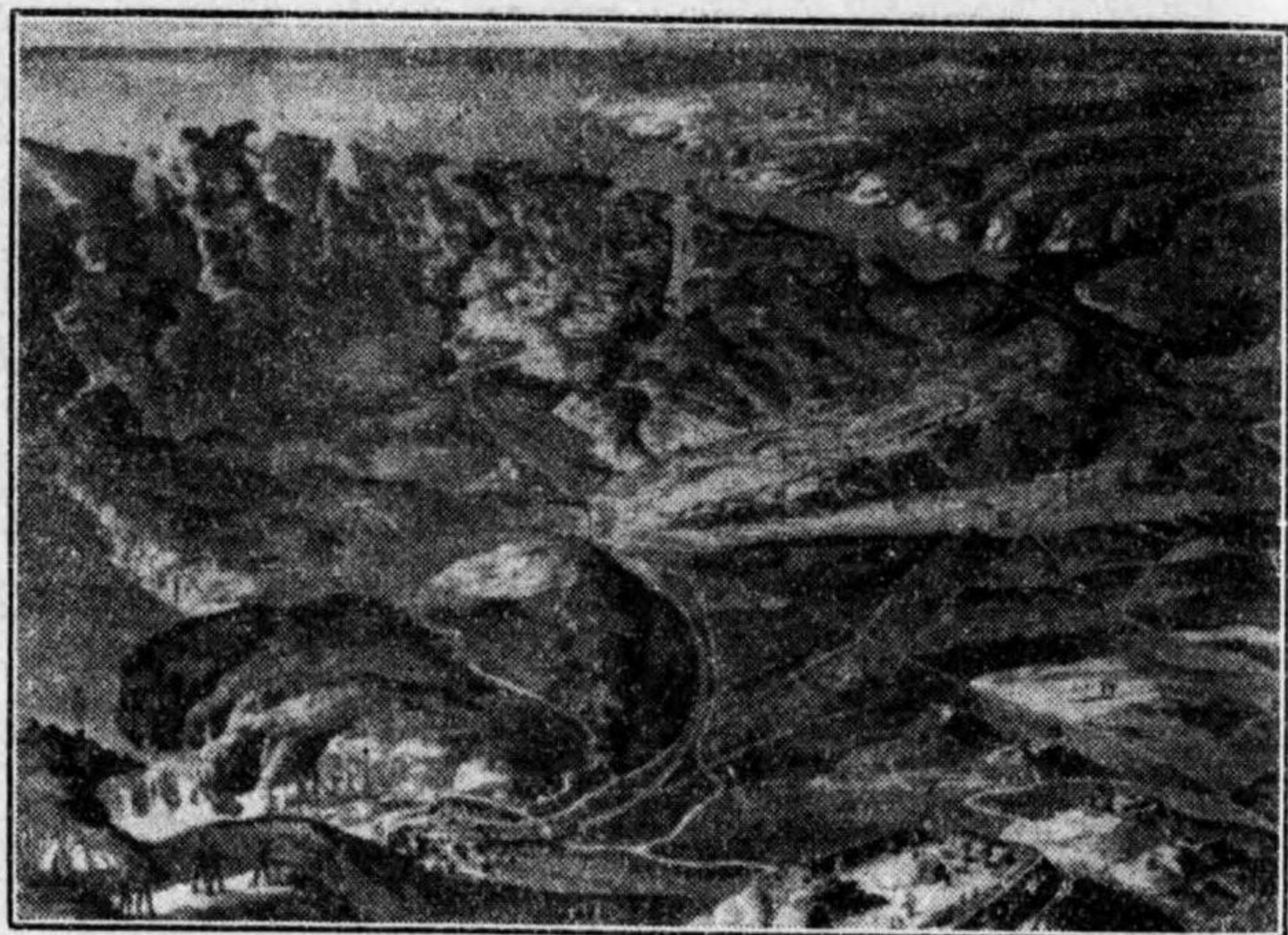
に失敗してより以來、漸く衰頹の風を示し、次第にその版圖を縮少した。即ち千六百八十七年には匈牙利を失ひ、千六百九十九年にはカールロヴィツチの平和條約に據りて匈牙利を奥地利に、アゾーフ海を露國に、ウルクライネ及びポドリヤを波蘭に割き、更に千七百七十四年のカイナルジャの平和條約を以て、クリミヤ半島、アゾーフ沿岸及びベッサラビヤを露國に與へ、而も露國をして土國の内治干渉の端緒を開かした。尙ほ第十九世紀に入りては、千八百四年塞爾比先づ獨立運動を起し、次で希臘は英佛露の援助を得て叛旗を擧げ、ナヴァリノの海戦に土耳其艦隊を破り、千八百二十九年のアドリアノーブル條約に依りて遂に其の獨立を承認せられ、モルダウ及びウアラカイ侯國(即ち今の羅馬尼)は又同時に半獨立國となり、次で千八百三十三年埃及は獨立の王朝を建て唯名義上土帝の主權の下に立ち、又之と前後して、アルゼリヤ及びチュニスに依りて佛國に依りて占領せられ



る敗を軍其耳土王親メグイオ—戦のタマセ

た。越えて千八百五十四年、クリミア戦争の起るや、土耳其は英佛伊の援助を得て露に勝ちたるも、爾來列強の干渉を受け、殆んどその保護國と異ならざるの狀態となつた。その後、千八百七十七年には、露と戦うて大敗し、サンステファノの城下の盟を約し、殆んど歐洲土耳其の地を失はんとしたるも、翌年伯林會議に依りマセドニヤの地を恢復した。されど羅馬尼、塞爾比、黒山國は全然獨立し、勃牙利は東ルーメリヤを合せて事實上土耳其の羈絆を脱し、ボスニヤ及ヘルツエゴヴィナ兩州は奥匈國の占領する所となり、キブルス島は英國の手に歸した。是に於て伯林條約前、土耳其帝國は、面積約六百萬平方吉米、人口五千有餘萬を有したるも、その條約後、實際土帝の主權を保持するの地は、面積二百九十八萬七千平方吉米、人口二千四百萬に過ぎざるに至つた。

その後、千八百九十七年土耳其は希臘と戦ひて勝ちたるも、クリート島は却つ



圖地の圍攻ルーボトスバセ  
(畫版木るたれは現に聞新の時當)

て列強干渉の下に希臘の治下に立つこととなつた。越えて千九百八年、勃牙利は遂に起ちて獨立の王國を宣言し、奥匈國は又ボスニヤ及びヘルツエゴヴィナ兩州を併合した。此の年青年土耳其黨の革命起り、遂に憲政を樹立したるも、爾來却つて内訌絶ゆる時なく、千九百十一年より翌年に互り、伊太利と戦を交へ、トリポリス及びキレナイカの廣大なる阿弗利加の領土を失ひ、引續き一昨年即ち千九百十二年の晩秋、巴爾幹戰爭起り、連戦

連敗の結果殆ど歐洲土耳其の全部を失ひ、今や歐洲の地に於ては、僅かに君府とアドリアノーブルとを含める面積二萬八千一百平方吉米、人口百八十九萬の地を保有するに過ぎざるに至つた。

## 二 青年土耳其黨の革命運動

以上は土耳其民族と阿士曼帝國の變遷に就てその大略を述べたのであるが、尙今日の土耳其を語らんとするには、是非共先づ青年土耳其黨の革命運動と巴爾幹戰爭に就て説かねばならぬ。

却説、往昔土耳其は燎原の火の勢を以て、歐亞兩陸を席卷し、向ふ所天下に敵なかつたが、一朝武運の傾くと共に、強弩の末、魯縞を穿たず、已に第十八世紀の中頃より、漸く衰亡の兆を萌した。是と言ふのは、爾來暗君相繼ぎ、新時代

の要求に適應せざるイスラム教義を墨守し、進歩改善の道を講ぜなかつたからである。然るに千八百八十年土帝の位に即けるマームード二世の如きは、土耳其の彼得大帝とも稱せられ、革新主義を執り、銳意歐洲の文物を輸入し、舊弊打破を志したる明君であつて、特に軍備の改革を志し、普魯西の兵制に法り、始めて七萬の常備軍を設置したのである。因に云ふが、此の時始めて土國の軍事顧問と爲り、専らその教育に力を致したるのは、後に普佛戰爭に於て參謀長として英名世界に轟したるモルトケ將軍であつた。マームード帝は此の外風俗の改良にも心をもち、或は従來の纏頭帽を廢して今の簡易なる土耳其帽に改め、或は頬鬚を延すの舊慣を破りて、その長さも一定の制限を加へたるが如き、その歐化主義に努めたるの事蹟は少からぬのである。然るに彼は不幸にして改革の半途にして世を去つたが、その子、アブド・ウル・メシッドも亦善く先王の遺志を紹ぎ、賢相レシ

ツド・パシヤの建言を容れて、千八百三十九年十一月三日グルハネ(王宮の名)の勅諭として世に知らる、改革令を發した。實に是は土耳其のマグナカルタと稱せらるゝものであつて、土國臣民の生命、名譽及び財産の安全を保證し、又收稅法を改良して公平を期したのである。更に又千八百五十六年、ハット・イ・フマエンなる勅諭を發し、法律上に於ける基督教徒と回教徒との區別を廢し、均しくその權利を尊重すべきを聲明した。此の外帝は西歐の制度に法りて參事院を設け、國立銀行(後の阿士曼銀行)を創立した。

然るに千八百六十一年、その後を繼げる皇弟アブド・ウル・アジスは、即位後の當初十年間は、ルシヂ・パシヤ並にミダッド・パシヤ等の良相に依りて輔弼せられ、諸般の改善を圖りたるも、一朝嬖臣マームード・ネヂムなるものを擧げて宰相と爲すに及び、忠良を遠ざけて姦佞の徒を近づけ、驕奢放逸を事とした。之が爲に

國庫は忽ちにして蕩盡し、千八百六十五年には三千六百七十萬土磅(土耳其の一磅は邦貨の約九圓に當る)に出でなかつた國債も、千八百七十五年には實に二億三千萬土磅の巨額に達した。仍て帝は益々租稅を増加し、人民を塗炭の苦しみに陥れ、特に基督教徒を虐待したので、叛徒到る處に蜂起し、ボスニヤ、ヘルツエゴヴィナ兩州の叛亂に次で、塞爾比及び勃牙利は獨立運動を起した。而も此の時露國公使イグナチエフの如きは巧みに土帝の嬖臣を籠絡し、得意の權謀を弄したので、遂に千八百七十六年の五月、血氣に逸る數千の回教大學生は國政の日に非にして外敵の侮りを蒙るを見て憤慨措かず、各武器を携へて君府の宮廷に押寄せ帝に迫るに内閣の交迭と内政の刷新を以てした。帝は之を聞きて周章狼狽し、直ちにその要求を容れて、ネヂム以下數名の大臣を免黜し、ルシヂ・パシヤに命じてミダッド・パシヤと共に新に内閣を組織せしめた。然るに新内閣の諸大臣は帝が内

心善政を布くの意なく、而も陰かに財寶を船に搭じ、何れかの地へ出奔せんとするの企圖なるを探知し、共に密議を凝して、その廢位を決し、五月二十九日の深夜、不意に軍隊を以て皇居を包圍し、その翌朝教務總監の手に成れる廢位の宣告書を帝に示して位より退かしめ、即日先帝アブド・ウル・メシッドの子ムラッド五世を擁立して、その後を襲はしめた。

新帝ムラッドは賢相ミダッド・パシヤの建議を容れて憲政の實施を約し、その準備に着手した。此の時、始めて『青年土耳其黨』の名を稱するに至りたる愛國憂世の志士は、漸く愁眉を開き、國家の前途に一道の曙光を認めためたのであつた。然るに茲に不慮の事變が起つた。廢帝アジスはトブカブ宮に幽閉せられたるの後、數日を出でずして崩御した。すると此の時曾てアジスに奉仕せし一近衛大尉にパサンなる者があつて、是は必定時の陸相ヒユサイン・アブニー一味の暗殺したるも



土耳其廢帝アブド・ウル・ハドド二世



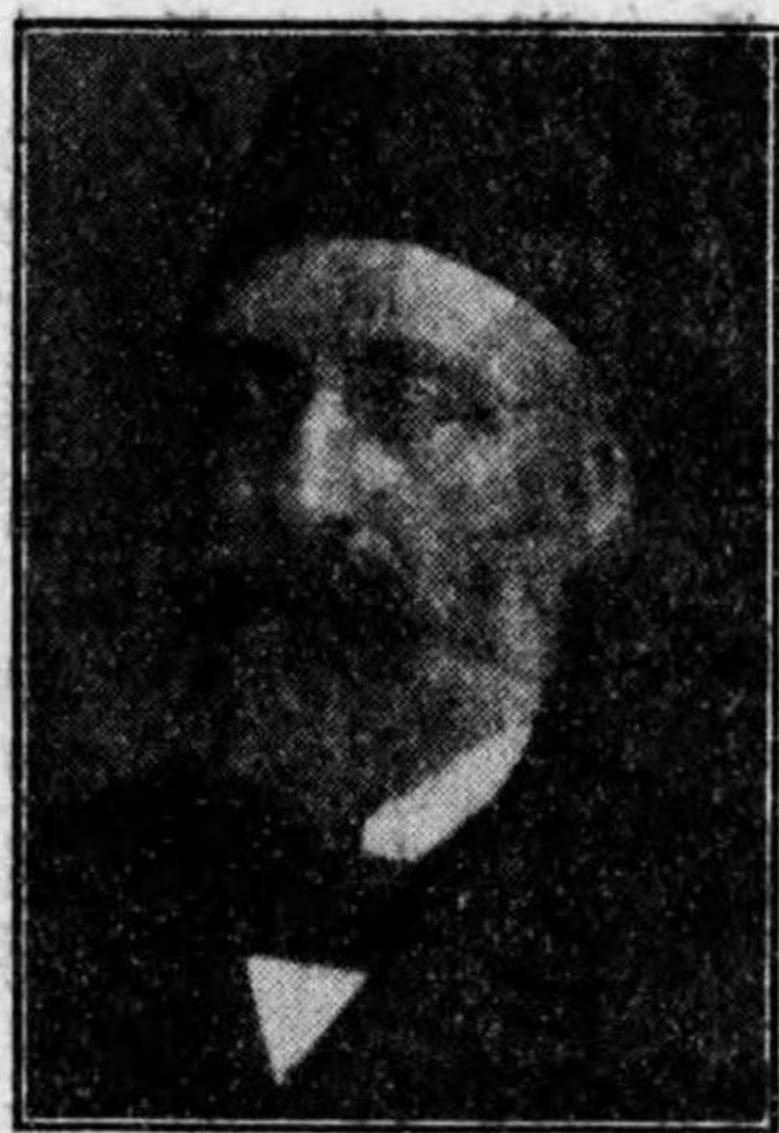
のと爲し、六月十五日突然内閣の會議室に闖入し、短銃を以て一撃の下に陸相を即死せしめ、又海相にも重傷を負はしめた。すると小心なるムラッド帝は之を聞き驚駭の餘り、精神に異状を呈し、政務に堪へざるに至つた。仍て已むを得ず位を皇弟に譲つた。時は是れ千八百七十六年八月三十日の事であつたが、實に此の皇帝こそ、後に頑冥不靈の暴君として、永なへにその汚名を土國史上に留めたるアブドウル・ハミッド二世である。

アブドウル・ハミッドの位に即くや、直ちに詔勅を發してミダッド・バシヤの建議に基ける憲法の制定に着手せしめ、千八百七十六年十二月二十三日を以て西歐諸國の例に法りたるカヌン・イ・エサシーの名を以て知らるゝ土國憲法を發布した。而して翌年三月九日議院の開院式を行ひ、露土戰爭中尙議事を進め、數多の法律及び豫算案をも議決し、良好なる成績を擧げて閉會し、尋て同年十二月を以て次

年度の議會を開いた。然るに爾來議會の勢力著しく増長し、政府の施政を攻撃して已まなかつた。是に於て帝は翌年即ち千八百七十八年の一月十九日を以て議會を解散し、爾來永久的に之を召集せず、憲法は事實に於て廢止同様の姿と爲つた。又之と同時に極力稅政の改革に努めんとしたる土國憲法の制定者ミダッド・バシヤは、帝の逆鱗に觸れてその職より退けられ、その後彼が君側より掃蕩せんとしたる宦臣等の爲めに謀られて先帝アジス殺害の叛逆罪に問はれ、千八百八十一年阿刺比亞の僻地タイフに追放せられ、四年の後刺客の毒手に罹りて悲惨の最後を遂げた。實に彼は土國に於て稀に見る所の賢明なる愛國的政治家であつたが、青年土耳其黨等の彼を革命第一の獻身者と稱し、宛も自由の守護神の如くに、今尙欽慕崇敬し措かざるも、實に理ありと謂ふべきである。

却說嚮きに憲政の樹立と共に土耳其の前途に放たれたる一道の曙光も、ミダッ

ドの最後と共に忽ちにして消滅し、復び土耳其は暗黒世界に立ち歸つたのである。即ち是より後、アブドウル・ハミッドの暴主的獨裁政治と爲つたのであるが、あれど彼は一面に於ては豪邁不屈の英傑であつた。彼は全イスラム主義を以て畢生の



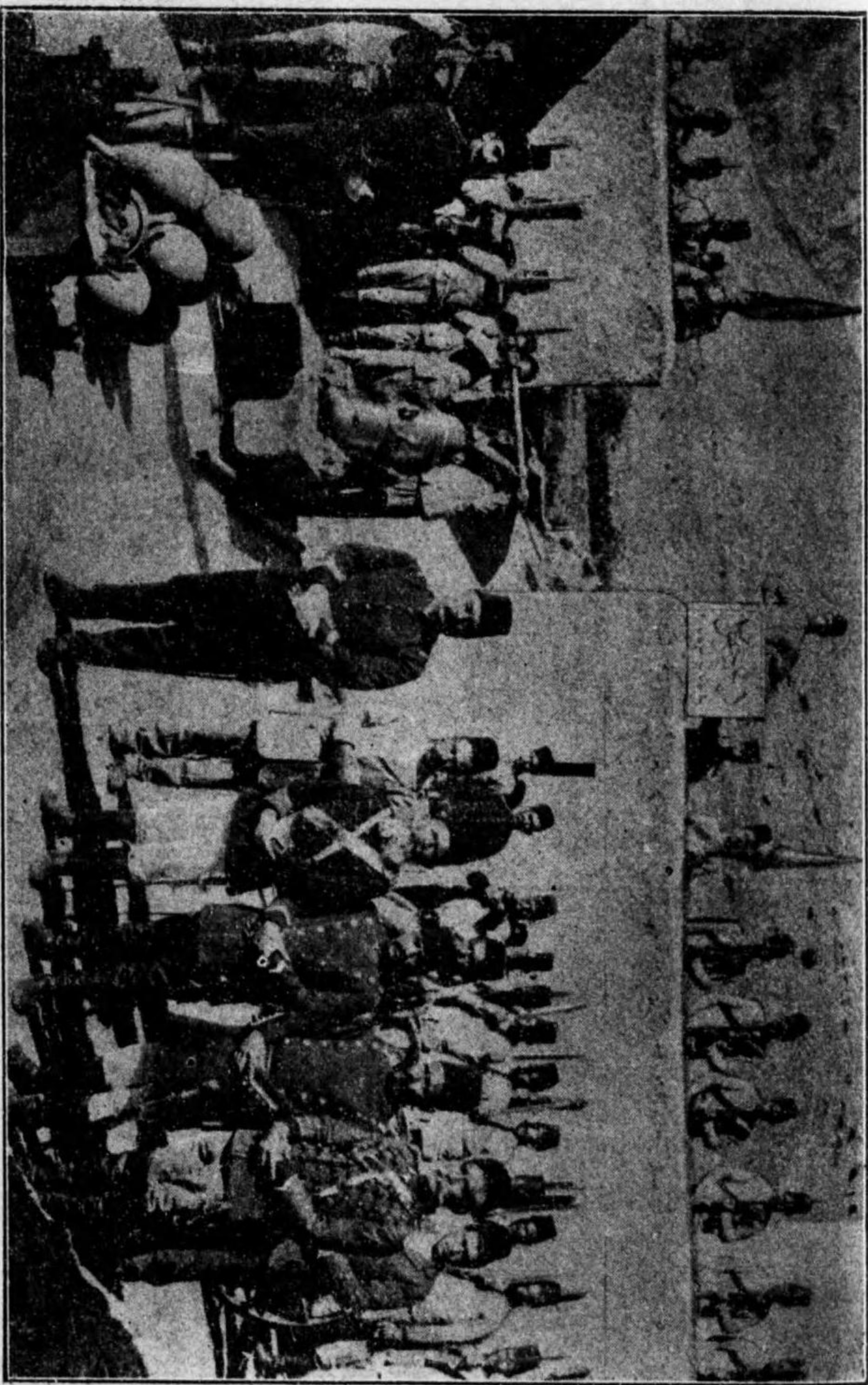
者身獻一第の命革國土  
ヤシバ・ドダミ

の目的とし、強大なる世界的回教帝國を建立し、自らその教主として偉大なる權威を把握せんとした。而して之が爲めにその精力を傾注し、時としては一令の下に數萬の勃牙利人或はアールメニヤ人の殺戮を行ひ、耶蘇教國をして震駭せしめた。斯くて彼は三十有餘年の長き治世間に於て、擅なる暴政を敢てし、幾度か列強の壓迫を蒙りたるも、平然として毫もその態度を改めなかつた。是は到底凡庸怯弱なる君主の敢てし得ざる所である。

今試に彼が暴政の一端を擧げんに、彼は官民の別なく、苟も民間に人望あり且つ勢力ある者には、盡く之に密偵を附して常にその行動を窺はしめ、若し寸毫にても自由或は革命的思想を抱く者あれば、容赦なく監禁拘留し、輕きは之を國外に追放し重きは之を處刑した。されば家宅の不可侵權、信書の秘密の如き、固より顧みる所では無かつた。而も人民にして私の宴會を催さんと欲するも、必ず之を官廳に届け出でしめ、三人以上食卓に就く時は密偵を放ちて之を監視せしめた。されば政治的集會の如きは、固より絶對に禁止せられたのである。特に出版物の檢閲に至りては、頗る嚴重を極め、極力自由思想の輸入を禁止した。例へばスペンサー、ダーウインなどの著書の如きも、之を所持する者あれば、之を不逞罪に問ふた。新聞の檢閲の如きは殆んど極端に達し、一切外國に起りたる暗殺事件或は社會主義の運動等に關する記事の登載を嚴禁し、若し之を犯す者があ

れば嚴刑に處した。されば佛國大統領カルノー、並に伊國皇帝フムベルドの暗殺せられたる際の如き、之を記載するに普通の病死を以てせしめたのである。又一日君府の外國居留地に於てセエーキスピヤのハムレット劇を演ぜんとしたるに、そは王殺しの悲劇であると云ふので、直ちに禁止した。

此の外寫真機、電話機或はタイプライターの如きも、陰謀の用に供せらるゝの恐れありとして、その輸入を禁じた。飽迄も歐化主義を排せんが爲めに、種々の口實を設けて外國人の内地旅行を拒絶し、又國防の必要上軍艦を購入したるも、殆ど全く之を西歐の海上に派遣せしめなかつた。但し陸軍に在りては青年將校を獨逸に留學せしめ或は又後にフォン・デル・ゴルツ將軍を聘して教育顧問としたるも、此等の新式教育を受けたる將校は甚だ危険なりとして、遠く邊陲の衛戍地に派遣せられた。是れを後に此等の青年將校が革命運動に加はつた一原因である。



土耳其邊境守備隊



革命後の土國宰相の肖像  
ヤシバ・ルミヤキ

尙又宮廷に對する人民の不平或は反抗心を薄  
弱ならしむる苦肉策として國內の各民族各宗徒  
を離間し、互に相反目嫉視せしめた。是れぞ又  
マセドニヤの地をして紛亂の絶ゆる時なからし  
め、延いては列強の干渉を誘致したる主たる原

因であつた。

斯くの如き状態であつたので、上下安んじて  
職に就くものなく、一方には又賄賂公行し、賣  
官請託の風盛んに行はれ、國政の樞機は宮中に  
於ける嬖幸者の手に占められ、政府は有るも無  
きが如くであつた。偶々、ヒルミ、或はキヤミル。



革命後の土國宰相の肖像  
ヤシバ・ルミルヒ

パシヤなどの良相があつたが、その實權は宦臣の手に握られ、殆んど木偶人と異  
ならなかつた。

茲に於て、さなきだに已に衰亡の機運に傾いて居た土耳其は、ハミツドの暴政に  
由り、殆んど絶望の域に達せんとした。されば何條憂世愛國の士が之を拱手傍觀  
することが出来やう。彼の青年土耳其黨なるものが、愛國の丹心禁ずる能はず、  
遂に蹶起して革命を圖るに至りたるも、實に理なりと謂ふべきである。

抑青年土耳其黨なるものが、始めて政黨的性質を帯びて土國政界に現はる、  
に至つたのは、土國議會が始めて招集せられたる千八百六十七年前後の事であつ  
た。然るにその後間もなく議會が解散せらるゝと同時に、彼等はハミツド帝の迫  
害を蒙り、一日も安んじて本國に留まること能はず、遠く去つて瑞西や佛蘭西  
の自由郷に身を寄せた。爾來十數年間、杳としてその消息を聞かなかつたが、そ

の間彼等は窃に同志を糾合して秘密結社を組織し、機關雜誌や新聞紙をパリその他の地に發行して、頻りに革命思想を同胞間に鼓吹した。斯くて千八百九十一年頃に至り、『統一進歩委員會』なるものをパリに設立して、その運動の中心とした。越えて千九百七年本國に於ける各種團體の委員をパリに召集して大會を開き、遂に協議の末、第一、現皇帝を廢する事、第二、現在の政治を根本的に改革する事、第三、千八百七十六年の憲法を復活する事を決議した。又之と同時にその本部をマセドニヤのサロニカ港に移し、陰かに全國に亙りて同志を募つた。苦心慘愴、或は床屋と爲り、或は行脚僧に變装し、ハミツド帝の施せる嚴密なる密偵の目を偷み、特に各地の軍隊内に入りて兵士間にも之を鼓吹した。その結果全國を通じて約八萬の同志を得るに至つた。依て愈々千九百八年八月の土國皇帝即位の紀念祭當日を期して事を舉ぐるに決した。

然るに同年一月澳國外相のサンジャック鐵道布設の宣言以來、列強間の對土政策漸く緊張を加へ、遂に六月英露兩帝のレヴァール會見に由り、マセドニヤの運命は旦夕に逼らんとした。是に於て青年土耳其黨は今や一日も躊躇するの秋に非ずと爲し、マセドニヤに於けるサロニカ軍團並にその他の軍團内に於ける不平運動を機として、遂に革命の旗を擧げた。此の時其先驅者と爲りて活動したるは、誰あらう、當時サロニカ軍團の參謀少佐であつた、即ち今日土國陸相として世に小ナポレオンの名を以て知らるゝエンヴェール・ベイを始め、モチスチールのニアジ・ベイ少佐(一昨年反對黨の爲めにアルバニヤに於て暗殺せられた)等であつた。斯くて革命軍はサロニカを中心として愈々その運動を開始し、ハミツド帝に向ひ直ちに憲政の復興を約するに非ざれば時を移さず君府に前進すべしと威嚇した。すると又君府の革命黨も多數宮庭前に蟠集して示威運動を行ひ、憲法の復活を要

求した。是に於て流石に剛腹なるハミッドも意外の變事に狼狽し、遂に七月二十四日を以てその要求を容れ、憲政の復興の詔勅を下した。

斯くの如くにして、千八百七十八年以來三十年間閉鎖せられたる土國議會も復び同年十二月を以て開會せらるゝに至つたのであるが、倏忽の間に革命の偉業を



イベ・ルー・エヴンエ

奏し、大に民心を博したる青年土耳其黨は、爾來新政府の黒幕と爲りて政治の實權を握り、一方議會の最多數を制して萬事意の如くならざるなきに至つた。茲に於てか漸く專横の氣色を露はしたが、新政樹立以來對外關係の土國に不利なるもの

多く、即ち同年十月勃牙利は起つて獨立を宣言し、奥匈國は又ボスニヤ、ヘルツエゴヴィナ兩州の併合を遂行したので、一時收攬した民心も次第に離反せんとするに至つた。仍つて老獪なるハミッド帝は此の機に乗じて陰かに青年土耳其黨に嫌

焉たる革命黨中の不平分子と守舊派なる回教黨等と共に謀し、君府第一軍團の兵士等を使喚して新政打破の叛亂を起さしめた。即ち千九百九年四月十三日夜も未だ明渡らぬ拂曉に、第一軍團の下士及び兵士等は不意に起りて、若干の青年土耳其黨の將校を屠殺し、更に進んで議院及び青年土耳其黨本部を襲撃して一二の大臣を殺戮した。意外の事變に、策の施すべき様もなく、青年土耳其黨の領袖は皆逃れて姿を匿した。仍つてハミッドの陰謀は首尾能く成功し、即日内閣を交迭した。

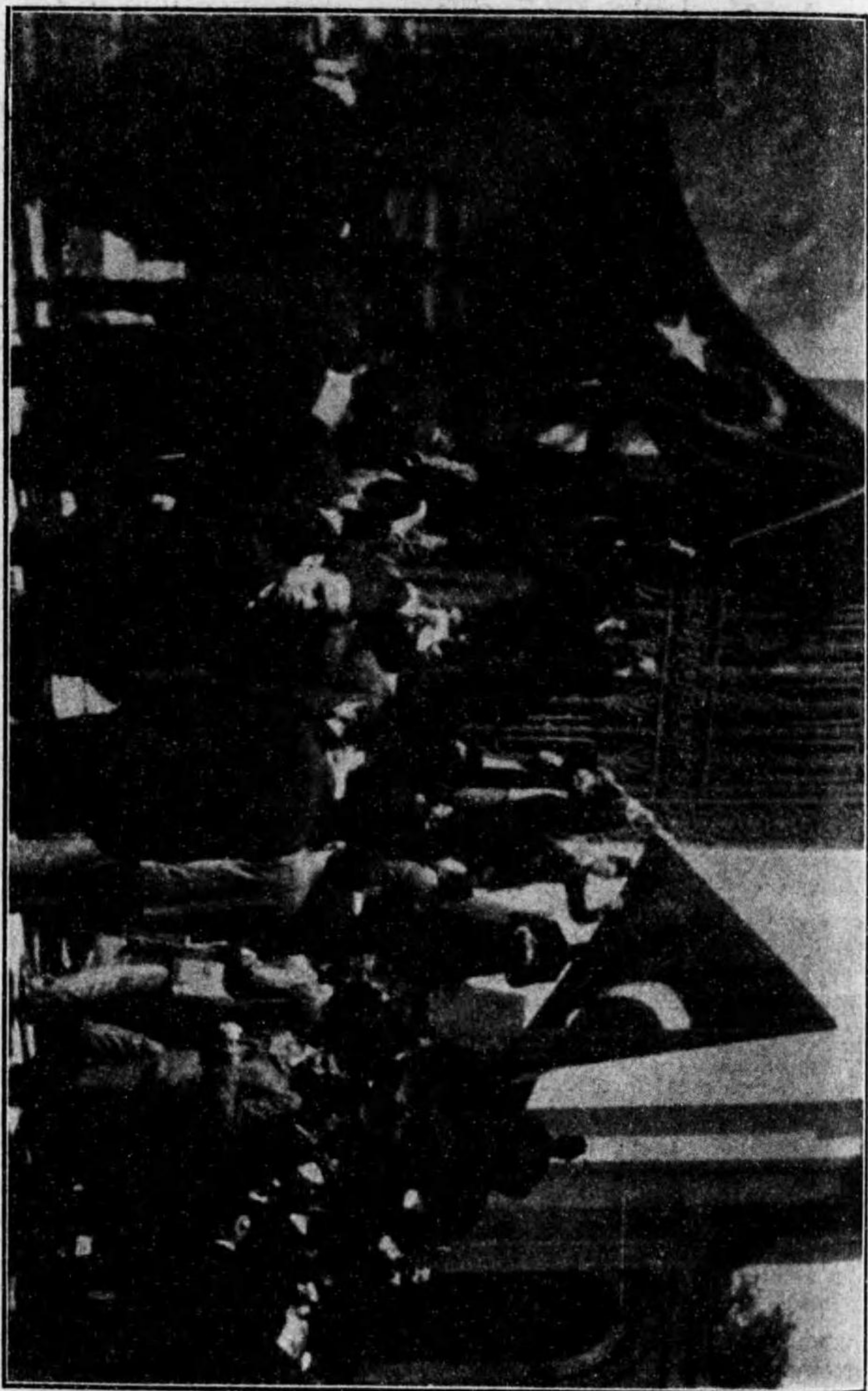
然るに此の報、青年土耳其黨の根據地なるサロニカに達するや、彼等は切齒憤慨して措かず、直ちにマセドニヤの各地に檄を飛ばして憲政擁護の義軍を起し、第三軍團長マームード・セフケッド・バシヤは自ら進んでその總司令官と爲り、旗幟堂々君府を指して進軍した。此の時彼の革命の先驅者たりしエンヴェール・ベイは公使館附武官として伯林に在つたが、急報に接して直ちに歸途に就き、同じく革

命の一勇將たりしニアジール・ベイはモナスチールよりサロニカに急行し、共に皆憲政軍に参加した。

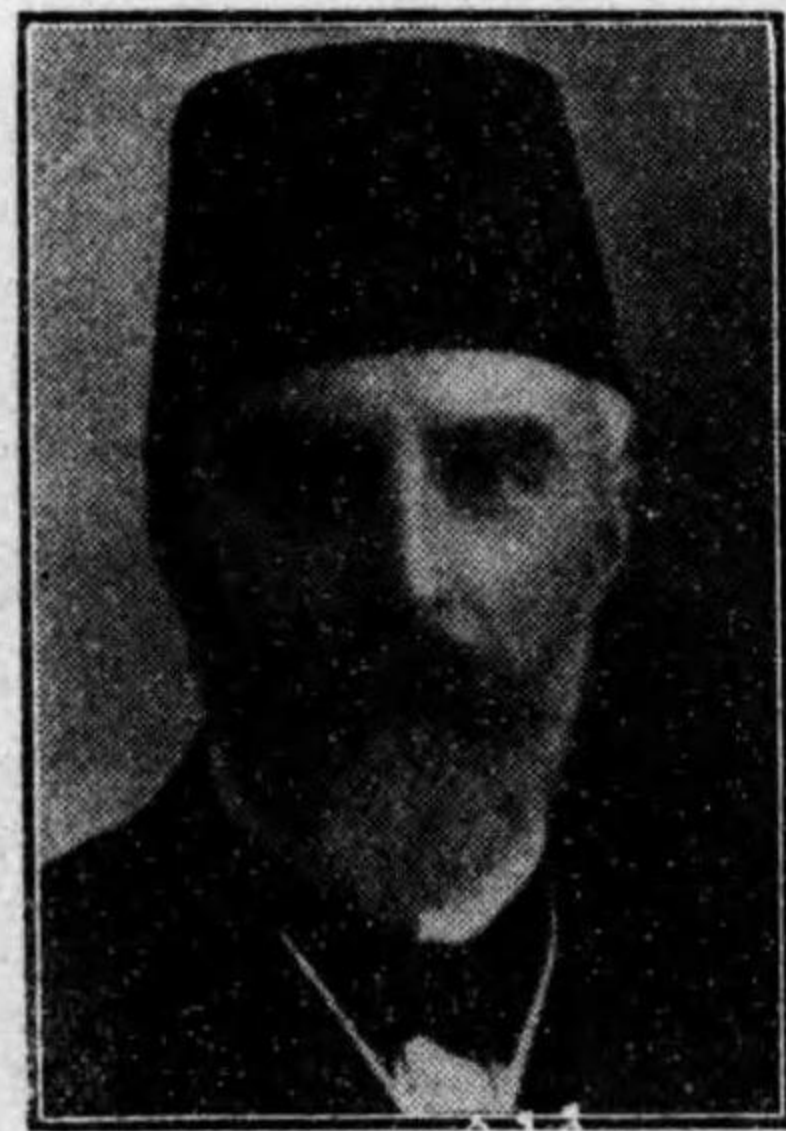
斯くて憲政軍は四月二十日君府を距ること遠からざるサンステファノに達するや、飽迄も立憲的動作に依りてその所志を遂げんと欲し、先づ上下兩議員を同地に召集し、同月二十三日國民議會を開きて、ハミッド帝の廢位を討議した。すると反對黨八十九名に對する贊成者百五十名の多數を以て之を可決したので、同夜直ちに憲政軍は進んで君府を攻圍し、一舉にして之を陥れ、同月二十七日、ハミッド帝の廢位を宣言し、皇帝モハメッド・レシエツド親王を擁立してその後を襲はしめた。現皇帝モハメッド五世は即ち是なのである。

茲に於てハミッド帝は三十有餘年の榮華も一朝の夢と化し、サロニカ（後小亞細亞に移された）に護送せられて配處の月を眺むるの身と爲つた。

式賀祝の復権政黨命其土耳其年八〇九一



斯くの如くにして第二次の土國革命は終りを告げ、復び青年土耳其黨の天下と爲り、マームード・セフケッド・パシヤは入りて陸相と爲り、武斷的執權を握り、新政府に於ける中心人物と爲つた。



青年土耳其黨の創立者  
現土國下院議長  
ア・ドゥメ・ザ・ベ・イ

第二次の革命に依り、土國禍患の淵源たるハミッド帝の獨裁政治を顛覆し、茲に自由平等を標榜する憲政を確立したるが爲め、人をして土耳其の前途に一道の曙光を認むるに至らしめた。然るにその後青年土耳其黨は銳意内治の改善と國權の回收とに努めたるも、政治上の經驗に乏しく、而も専ら自黨に私して結託を事とし、或は反對黨を壓迫してその政社に解散を命じ、或は不正なる選舉を行ひて自黨の勢力を張りたるが爲め、國內到る處に不平の聲を聞く

に至つた。加之革命の當初、人種宗教の區別なく、同一の權利と自由とを附與すべきことを宣言し、之が爲め基督教民族をして新政を謳歌せしめたるに拘はらず、その後自ら國政の樞機を握り、議會を以て己の爪牙とし、漸く專横の行動に出づると同時に、曩に爲したる一視同仁の宣言の如きも、何時しか之を暗中に葬り去り、偏狹なる愛國主義の下に土耳其民族本位の政策に出で、他民族に對すると毫も舊政時代と異なること無く、一方又嚴峻なる中央集權主義を採りたるが爲め、暮年ならずして猛烈なる叛亂アルパニヤに起り、次いで又阿刺比亞のゾータン並にクルド族地方にも亦同じく動搖し、内訌絶ゆるの時がなかつた。而して又千九百十一年伊太利とトリポリス問題に由り衝突して遂に開戦し、その結果廣大なる阿弗利加の領土を失ひ、失態に又失態を重ねた。

是に於て青年土耳其黨内閣は國內の非難に堪へずして、遂に千九百十二年七月



下旬、陸相セフケッド・パシヤの辭職に次いで總辭職を爲し、之と同時に青年土耳其黨の最多數を占めたる議會も亦解散の不幸に遭遇し、三年以來土國の政體を獨占し來りし同黨は、脆くも茲に殄落を告ぐるに至つた。仍て其政敵たる自由聯合黨より成れる内閣之に代り、キヤミル・パシヤ其牛耳を握つた。然るに其後幾程もなくして、マセドニヤに於ける紛擾より、茲に端なくも巴爾幹戰爭は勃發した。

### 三 巴爾幹戰爭と土國の現状

本來巴爾幹戰爭は、勃牙利、塞爾比、黑山國及び希臘の四ヶ國が、土耳其革命後内憂外患交も到り國內の日に疲弊せるの虚に乗じ、マセドニヤの紛亂を口實として、宿年の野心を達せんが爲めに、一昨年即ち千九百十二年十月八日を以て起つたのであるが、憐れにも土耳其は連戰連敗の結果、同年十一月休戰を約し翌十二

月中旬倫敦に平和會議を開催した。此の時青年土耳其黨は事國家の存亡に關するを以て、私怨を忘れて現内閣を支持し、舉國一致の態度を採りつゝ、あつたが、キヤミル内閣が列強の強硬なる勸告に屈從し、翌年即ち千九百十三年の月中旬愈よ其條件を以てアドリアノーブルの割讓を承認せんとするに至り、國民の激昂甚だしきを見て、此の機乗ずべしと爲し、一月二十三日小壯氣銳のエンヴェール・ベイは突如同志と共に示威運動を行ひ、挺身内閣に闖入してキヤミル内閣に辭表を提出せしめた。その際彼等に抵抗したるナジム元帥及びその幕僚二三名と格闘して之れを銃殺した。斯くて首尾能く反對黨の内閣を顛覆し、セフケッド・パシヤを推して首相とし、自黨より成る内閣を組織し、茲に前年の恨を報いたと同時に、飽迄も亞府の割讓を拒絶した。此の結果平和談判忽ち破裂し、再び二月に入りて開戦を見るに至つた。然るに其後戰鬪土軍に利あらずして、遂に三月二十六日アド

リアノーブルは勃塞兩軍の爲めに陥れられた。茲に到つては、流石の青年土耳其黨内閣も如何ともする能はず、列強に向つて平和の調停を哀求した。仍て英國外相グレーの斡旋に由り、再び倫敦に平和會議を開始し、遂に五月三十日を以て



暗殺士國前陸相  
シナ・ム・パシヤ

假平和條約の調印を完了し、第一次の巴爾幹戰爭は一先づ終局を告げた。

然るに、未だ平和後三句を出でざるに、占領地分配の争より巴爾幹同盟同志間の戰爭破裂し、羅馬尼も亦之に参加した。四面楚歌の裡に立てる勃牙利は前後左右に敵を受け、不名譽なる戦敗を遂げ、不本意ながらも八月十日ブカレストの平和條約に調印した。斯くの如くにして、無意義且つ不合理を極めたる第二次の巴爾幹戰爭も、兎に角平和の局を結んだ。

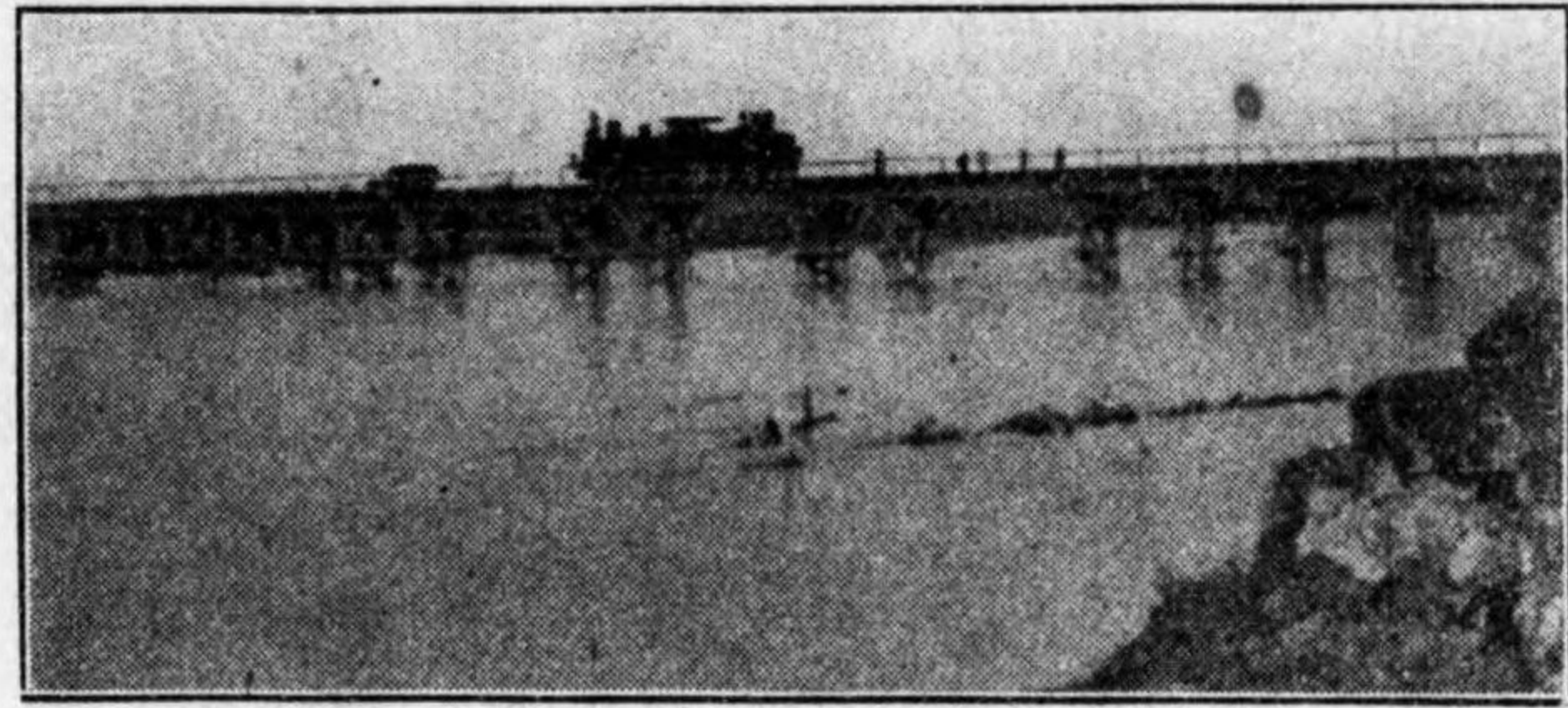
話頭一轉、青年土耳其黨内閣は前述するが如く、キヤミル内閣の臍甲斐なきを憤り、亞府の恢復を主張し之を顛覆して立ちたるも、その健氣なる宣言にも似ず、亞府は却つて敵の爲めに占領せられ、遂に屈辱的條約を結びたるを以て、又もや不平の聲民間に起つた。すると六月十一日の事であつたが、宰相セフケット・バシヤは刺客の手に非命の最期を遂げた。是は反對黨の陰謀に成つたのであつたが、政府は時を移さず、君府に戒嚴令を布き、其嫌疑者百五十名を拘引して之を獄に下し、尙その主謀者數名を處刑した。斯くて青年土耳其黨は復び反對黨をして起つ能はざらしむる底の峻烈なる手段を盡したが、又一方漸く離反せんとする民心を收攬せんが爲めに、勃牙利が第二次の戰爭に於て、旗色の更に振はざるの機に乗じて、列強の強硬なる忠告をも顧みず、軍をトラキヤに進め、遂に七月二十三日アドリアノーブルを占領した。尙トラキヤの地を永久に恢復せんが爲め、更に大

軍を出して八月中旬、マリツツヤ河西に前進し、勃牙利を威嚇して境界改訂の主張を貫かんとした。此の時勃牙利は戦敗後、到底土軍に抵抗するの力なく、一方列強も亦土耳其の亞府占領を既成の事實として認容せんとするの意向を示したるを以て、已むを得ず土國と直接談判を開き、幾多の折衝を重ねたるの末、遂に九月二十九日に至り君府條約を結びて、殆ど土國要求の全部を承認した。茲に於て多士土耳其は嚮きに蒙りたる屈辱を雪いだ。之が爲め、國民は大に政府の成功を謳歌した。仍て青年土耳其黨の威信も頓に加はるに至つたが、是と言ふのも主として主戦派の首領であつたエンヴェール・ベイの方寸に出たのであつて、現に亞府の恢復の如きは彼の力が與つて最も多かつたのである。斯くて本年即ち千九百十四年の一月に至り彼は内閣に入りて、陸軍大臣の椅子に就き、故セフケツド・バシヤ同様、政府の牛耳を握りて今日に至つた。僅かに六年前彼が初めて革命の亂

を起した當時には一少佐に過ぎぬのであつたが、今や一躍して大臣と爲りバシヤの尊稱を取り、今回の歐洲戦争に際しても、最初より彼は主戦論を主唱し、遂に最近土耳其をして蹶起して之に参加せしめたのである。その行動の是非は姑く之を措き、兎に角彼は土國政治家中異彩を放つ一傑物には相違ない。世に小ナポレオンの稱あるも偶然で無いと思ふ。

閑話休題、亞府の恢復に成功したる青年土耳其黨は、同一筆法を以て希臘に占領せられたる多島海の諸島を恢復せんと志し、屢々希臘に向かつて威嚇的行動に出で、兩國の關係危機に逼らんとしたるも、列強の干涉に依り、漸く大事に至らずして已んだ。されど土耳其は今年の秋英國に注文せる戦艦二隻の落成を待つて、必ず希臘に向つて戦を開くであらうと識者間に觀測せられた。

尙茲に一言すべきは土耳其と獨逸との關係である。由來獨土兩國の關係は親善



橋鐵の河レフイセ道鐵ドッダクバ

であつたが、特に千八百九十九年獨逸皇帝ウイヘルム二世が、皇后と俱に君府を訪ひ、時に土帝アブドウル・ハミツドと親密なる友誼を結び、又その節パレスチナに遊び、ダマスクスに於て獨帝は『世界に散在する三億萬の回教徒は向後獨帝を以て唯一の親友と認め得可なり』との宣言を爲した。是より以來兩國の關係は益々親密の度を加へ、何事によらず獨逸に信賴し、陸軍の改革は勿論バグダッド鐵道の如きも之を獨逸に依託したのである。而して又青年土耳其黨の政朝と爲りても、その將校の多數は獨逸に留學し、或は又フオンデル・ゴルトツ將軍の下に教育を受けたるの結果、親獨

主義に傾き、就中エンヴェールの如きは其の最たるものである。土獨親善の關係は依然として持續し、現に今年の一月リーマン・フォン・ザンデルス將軍以下數十名の獨逸將校を新に招聘し、陸軍改革の全權を委任した。斯くの如きは獨逸の巧妙なる政策の結果であるが、特に巴爾幹戰爭後、獨逸が又全力を土耳其の懷柔策に傾注しつゝ、あつたのは掩ふべからざるの事實である。されば今回土耳其が獨逸に味方して歐洲の戰亂に加りたるは理の當然である。

土耳其の現皇帝は名をモハメツド五世と稱し、オスマン朝第三十六代の君であつて、千九百九年四月青年土耳其黨に依りて擁せられ、廢帝アブドウル・ハミツドの後を繼いで立つたのである。アブドウル・メジツドの皇子であつて廢帝の皇弟である。當年已に七十歳の高年であるが、その人と爲りに就ては吾人多く之を知らざるも、先年タイタニック號沈没の際、非命の最後を遂げた有名なる英國の



世五ドッメハム帝皇現其耳土

評論家ウイリアム・ステッド氏は、その前年君府漫遊の際モハメッド帝に親しく謁見して、談話を交へたが、その當時の感想を自分の主宰する『評論の評論誌』に記載した事がある。之に據ると帝は善く世界の太勢にも通じ、常識にも富んで居る歐洲主義の人である様に思はれる。而も氏は帝をば土國唯一の有爲なる人



ヤシハ・ドイサ

物であると評し、屑々たる青年土耳其黨の政治家などの到底企て及ぶ所で無いと迄言うて居る。果してその言の通りであるや否やは分からぬが、兎に角廢帝ハミッドの如き頑冥不靈の君主で無いことだけは確かな様である。併乍最近外電の報ずるが如く、帝が回教徒に向つて『神聖戰』の勅令を下したものとすれば、矢張何處迄も土耳其的君主の臭味を脱せぬものと評せねばならぬ。次に現土國大宰相サイド・ハリム・バシヤに就て言はん彼は昨年六月セフケッド・バシヤの暗殺後、之に代りたるのであるが、別に之と云ふ程の人物では無いが、埃及の親王であつて、非常なる素封家で、青年土耳其黨中に人望否寧ろ勢力を有して居ると云ふ事である。されど政治上何等の經驗も又主張もあるのでは無く、實際の政權は陸相のエンヴェール・バシヤが握つて居るらしいのである。尤も内相のタラート・

ベイも仲々手腕のある政治家である様に聞いて居る。  
 要するに土國の現政府にはエンヴェール・パシヤを除いては是と名ざすべき人物を見受けぬのである。若し今回の蹶起が失敗に終つたならば、帝國の瓦解を來たす以前に於て、青年土耳其黨の破滅を見るであらうと思ふ。

## 第二編 地理的觀察

### 一 一般地理的概観

土耳其帝國は土耳其語にてメマリツク・イ・オスマニエと云ひ、オスマン帝國の意である。つい三年前迄は歐羅巴、亞細亞並にアフリカの三大陸に跨り、總面積二百九十八萬平方吉米、人口二千四百萬を有して居たが、伊太利にアフリカの領土

即ちトリポリス及びキレナイカを奪はれ、次いで巴爾幹諸國に歐洲土耳其の最大部即ちマセドニヤを取られ、アルバニヤも亦獨立したので、今では總面積が一百九十九萬平方吉米、人口が二千一百萬と爲つた。即ち此の最近三年間に一百萬平方吉米と云ふ大きな土地を失つたのである。それでも尙我が日本帝國（朝鮮を含む）の殆んど二倍半、獨逸帝國の三倍に等しいのである。加之地味と云ひ、氣候と云ひ又地理的位置と云ひ、全く申分のないのであるから、若し土耳其が眞に覺醒して歐洲文明の利器を利用し、銳意殖産興業の道を講じ、一方知識の開發を圖つたならば、世界に於ける優秀なる一大強國と爲ることが出來得るのである。  
 仍で先づ土耳其の殖産上の事に就て説かうと思ふ。本來土耳其は地味の頗る肥沃であつて、天産物の豊富なるにも拘はらず、農業は極めて尙幼稚である。されど穀物の外に、煙草、棉花、葡萄、オリブ、果物、珈琲、阿片などを多く産

出する。就中、煙草の如きは到る處に産し、その良種なるを以て、世に聞え、重要なる輸出品である。棉花も頗る有望であるが、又阿片の如きはその産額毎年六百萬圓を下らぬ。次に又絹布は名産中の一であつて、小亞細亞のブルッサ、イズミツドの二地方のみにても年に一千萬圓からを産出し、特に生絲並に繭は輸出品中の大宗である。

特に注意すべきは亞細亞土耳其が礦物に富んで居る事である。即ちその種類は金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、石炭、水銀、コロム、アンチモニー等で、又山鹽の如きは海外に輸出する程である。石油坑も近年メソポタミヤ地方に發見せられた様な次第で、若し近世の學理を應用し、一方運搬の便を圖つたならば、世界有数の礦業國となるの望がある。

山林にも富んで居らぬのでは無いが、之を保護せぬ爲めに今日にては見るに足らぬ。海産物は又豊富で、ボスポラス海峡だけでも漁獵の收額が年に百萬圓からあると云ふ。

斯くの如く、土耳其は物産に於て天與の恩恵を受けて居るのであるが、奈何せん政府が之を保護奨励するの道を講ぜぬが爲に、之を利用する事が出來ざる貧弱國の状態を脱し得ぬのである。

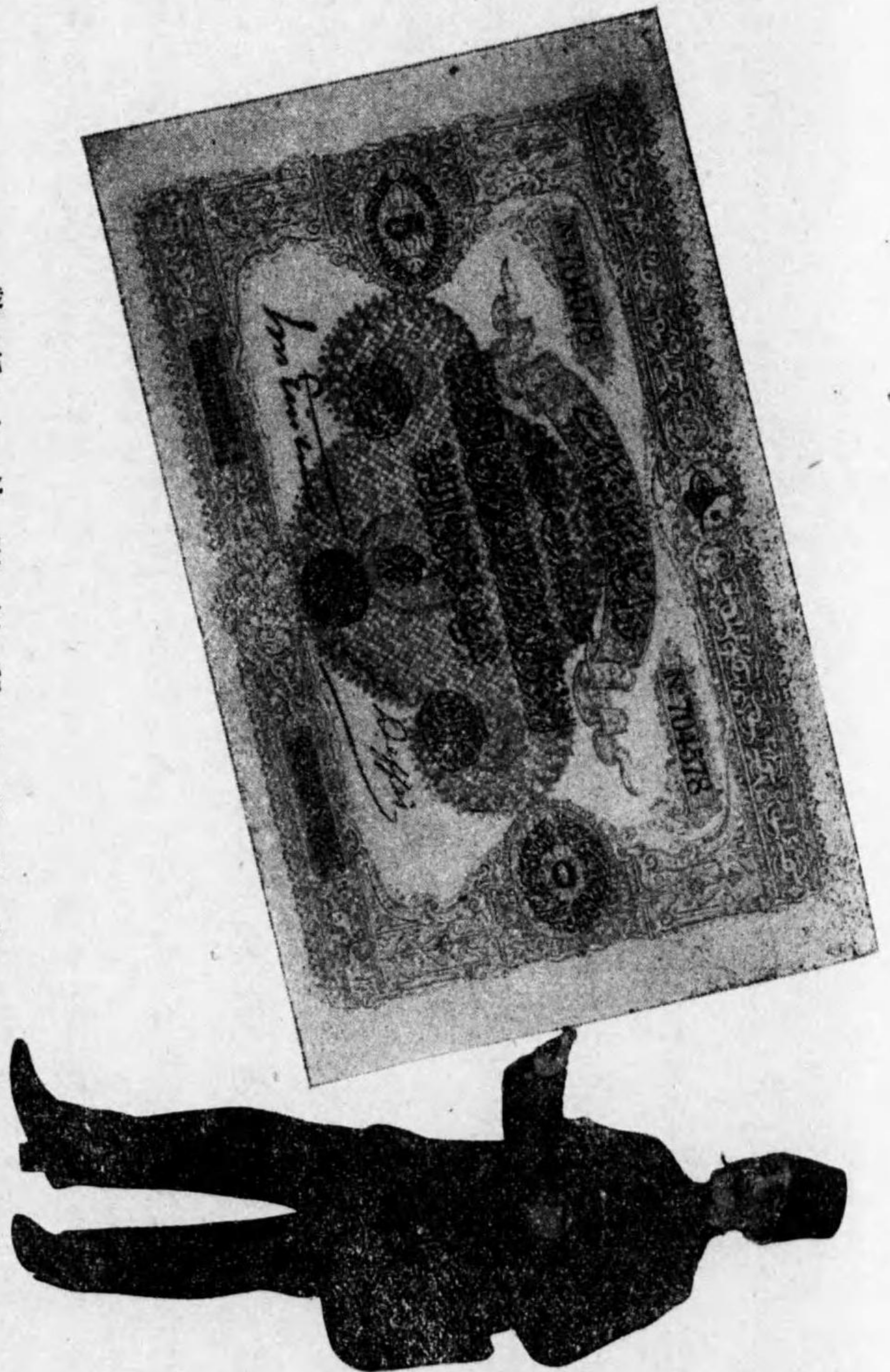
特に又工業に至つては全く見るに足らぬのである。されど牧畜は土耳其人や阿刺比亞人の唯一の産業であるので、畜産と共に製毛業や製革業は比較的發達して居る。而もムスリン織、天鵝絨、絨氈などは、土耳其の名産として世に聞えて居る。

次に貿易であるが、千九百十一年の輸出額は二千二百四十七萬土磅（土耳其の一磅は我が九圓）で、輸入額は三千七百七十七萬土磅である。即ち一千五百

萬土磅からの輸入超過である。而して輸入品の主なるものは、砂糖、麥粉、穀類、綿織物、石油、珈琲等で、輸出品は繭、無花果、羊毛、生絲等である。

又貿易國では英國が筆頭で、輸出入總額が一千五百萬土磅、之に亞ぐものが獨逸で八百六十八萬土磅、佛國が七百三十萬土磅、米國が四百八十六萬土磅である。その他は埃匈國、希臘、伊太利等である。

交通に就て言ふと、土國政府が實際自分で布設して居る鐵道はダマスクスよりメツカに到るヘジャス鐵道ばかりで、その他は獨逸の經營にかゝるアナトリ及バグダッド鐵道や、佛國のシリヤ鐵道や英國のスマイルナ、エイヂン鐵道など皆外國人の手に依つて成つて居る。その總延長は小亞細亞に於て二千三百七十二吉米、シリヤ及び阿刺比亞に於て二千二百九十四吉米である。此迄歐洲土耳其に於て一千九百九十四吉米からの鐵道を有して居たが、巴爾幹戰爭の結果その領土と





共に之を失ひ、今では唯アドリアノールから君府に到る所謂東方鐵道の一小部分を保有するに過ぎぬ。

市街の電車もつい近頃始めて君府、スミルナ、ダマスクス、パイルートに於て外國人に依りて敷設せらるゝ事になつた程で、有ゆる交通機關の不完全なる事は支那よりも遙かに劣つて居る。特に亞細亞土耳其に於て然るのであるが、眞の意味の國道なるものは、殆んど皆無と謂つてもよい。

郵便電信の如きも、その機關はあるにはあるが、頗る不完全で、而も全く信賴が出来ぬ。故に外國人は各自國の郵便局を設置して居る。特に土耳其の内地に入れば、殆んど皆無同様である。故に吾輩等の如きも、土耳其旅行中二三ヶ月間本國へ通信することが出来なかつたので、大に家人を心配させた様な次第である。

## 二 土耳其の住民

是より少しく土耳其帝國特に亞細亞土耳其に於ける住民の事に就て述べよう。正確なる統計は無論知ることには出来ぬが、土耳其人の總數は約九百五十萬人であるが、その内七百五十餘萬は小亞細亞に住んで居て、その人口の七割五分を占めて居る。宗教は全部回教に屬して居る。

土耳其人以外のものは、その人數から云へば、阿刺比亞人が第一で、彼此六百萬ばかりである。彼等は土耳其人と同様、主として回教を奉じて居るが、その多數は蒙昧なる遊牧民である。之に亞いではアルメニヤ人と希臘人であるが、アルメニヤ人は、紀元後第五世紀頃、一大王國を高加索地方から小亞細亞にかけて建立した事があるも、その後滅亡して今では露西亞と土耳其とに分割せられて居る。

彼等は印度歐羅巴民族に屬して居て、その宗教は基督教のグレゴリアン派即ちアルメニヤ教會なるものに屬し、教長は君府にその本山を構へて居る。性質は伶俐で又勤勉であり、特に商業に長じて居るが、兎角利己的なるので他に嫌惡せらるるの風がある。乍併土耳其に住する他の基督教徒中、彼等は最も風俗習慣が土耳其人に近いので、土國の官吏やその他に任用せられて居る。その總數は約二百八十萬で、土耳其領内には百二十萬ばかり住んで居る。

希臘人は今日では、殆んど全く混血種となつて居て、スラヴやアルバニヤ人などの血液が多く混じて居る。されど多島海諸島や小亞細亞の沿岸には、純血に近いものが今尚多少存在して居る。宗教は所謂希臘正教に屬して居るが、回教に改宗したるものも多少ある。亞細亞土耳其には約百五十萬ばかり住んで居る。之に亞いてはクルド人であるが、彼等は太古のアッシリヤ人の後裔であるとい



堂水洗世二ムルヘルイウと院寺教回ドッメーア

ふ説もあるが、今では殆んど皆蒙昧なる遊牧民であつて、特に慄悍なるを以て知られて居る。その總數が約二百五十萬で、土耳其領内には百二十五萬ばかり居る。彼等の住地はクルヂスタンの名を取り、波斯迄に及ぼして居る。宗教は主として回教を奉じて居る。

此の外にシリヤ人や、猶太人や、ドルーズ人や、チエルケツス人やジョルジャヤ人等で、尙少數の韃靼人やトルクメン人なども住んで居る。

### 三 地誌一斑

更に進んで地誌に移るが、今日土耳其帝國の主要部である亞細亞土耳其は北緯二十八度乃至四十一度、東經二十五度乃至四十八度に互るの地に位して、小亞細亞、アルメニヤ、クルヂスタン、メソポタミヤ、シリヤ及び阿剌比亞地方より成つて居る。

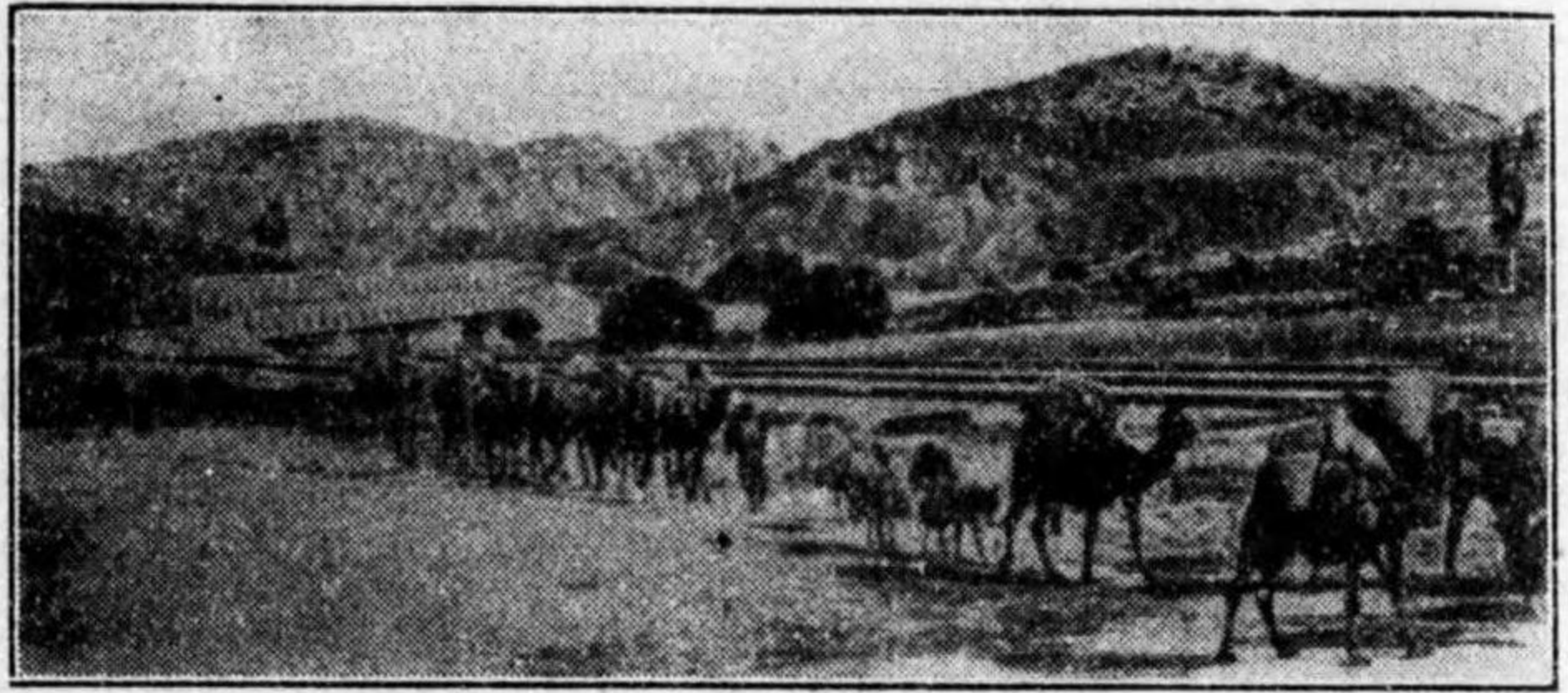
(1) 小亞細亞

小亞細亞は一に又アナトリアと稱し、土耳其人の所謂アナドリ（即ち東方の地の意）である。その面積は五十萬一千平方吉米、西班牙と殆んど同一大であるが、我が帝國より朝鮮を除きたるよりも遙に大きい。世にオスマン朝發祥の地を以て知られ、今尙土耳其人がその住民の最多數を占めて居る。即ち此の地の總人口一千萬の内土耳其人は七百五十萬餘を算し、希臘人が一百餘萬、アルメニヤ人が

六十萬ばかりである。但し土耳其人は主として内地の村落に居住し、農業若しくは牧畜に従事して居る。之に反して希臘人やアルメニヤは多く沿岸の都會に在りて商工業を營んで居る。若し一朝土耳其帝國が瓦解する様なことがあつたならば、此の地だけは恐らく依然として土耳其人の手に残るであらうと思ふ。地勢は半島形を爲して、東より西に向つて延びて居る。亞細亞土耳其の南半部が概ね皆單調なる平地であるに反し、此の地はアルメニヤと共に到る處に山岳丘陵が起伏し、平均海拔一千乃至一千三百米突の高臺より成つて居る。その最も低き地點はツスチヨルル湖の谷地でコニヤの北西に在る。その西南端より東北に向つて走るタウルス山脈に依りて、シリヤ及びメソポタミヤに天然的境界を成して居る。河流は比較的少なく、舟楫に便なるものが無いが、處々に鹹湖がある。氣候は地方によりて異なつて居て、内地は雨少く、夏冬共に稍や酷烈であるが、

地中海の沿岸地方は之に反し、雨多く、寒暑共に溫和である。されど北部の黒海沿岸は冬は降雪多く寒暑共に酷烈である。物産は頗る豊富で小麦、大麦及び玉蜀黍の外、煙草、棉花、阿片、繭、生絲等が主なるもので、特に鑛物に富めるを以て知られて居る。

都市の重要なものを挙げれば、先づ第一がスミルナ港で、多島海に臨み天然の良好なる港灣を有し、小亞細亞の産物は主として此の地を経て海外に輸出せらる。その主なるものは煙草、棉花、繭、生絲などである。人口は二十五萬を有し、君府に亞ぐ屈指の大都會である。その最多數は希臘人で土耳其人は僅かに約八萬に過ぎぬ。外國人中では伊太利人が最も多數で約七萬を算し、之に亞ぐものは佛埃兩國人である。三條の鐵道の起點であつて、一は東の方カサバを経てアナトリア鐵道(バグダッド鐵道の本幹)に聯絡し、二は北の方マルモラ海岸のバンデルマ



新舊雜居のバグダッド鐵道走るに傍る駝駱を追ふ商隊の群依然たり

港に通じ、三は南の方エイヂンを経てエゲルデルに到るのである。前の二線は佛國の資本に成り、後の一線は英國會社の經營に係つて居る。

此の外オスマン朝の舊都ブルツサはマルモラ海より三十吉米の地に位して居て、人口約八萬を有し、絹布絨氈の名産地である。

●●● アンゴラはアナトリア鐵道東部線の終點で、人口約四萬を算し、附近には歴史上の遺跡がある。

●●● コニヤはアナトリア鐵道の重要地點で、是よりバグダッド鐵道が分るのである。市の人口は約十萬で、中部アナトリアに於ける最も繁華なる都會である。黒

海に臨みてはトラペズンド港が最も重要な貿易港であつて、人口約十萬を算し、古來より波斯及びアルメニヤと歐洲との交通路として知られて居る。佛國は之を起點として東部アナトリア鐵道を計畫して居る。此の外シムソン及びシノペ港がある。

地中海に臨みては、タウルス山脈の南方にメルシナ港がある。千八百三十二年に始めて開きたる貿易港で、アダナ市に通ずる八十六吉米の鐵道がある。人口は二萬餘である。アダナはキリキヤ平原に位し、人口約八萬を有し、バグダッド鐵道の重要な通過點である。キリキヤ平原は有望なる棉花の産地である。

(2) 土領アルメニヤ及びクルヂスタン

土耳其領アルメニヤはアナトリアの東方に位し、殆んど全部が山地であつて、

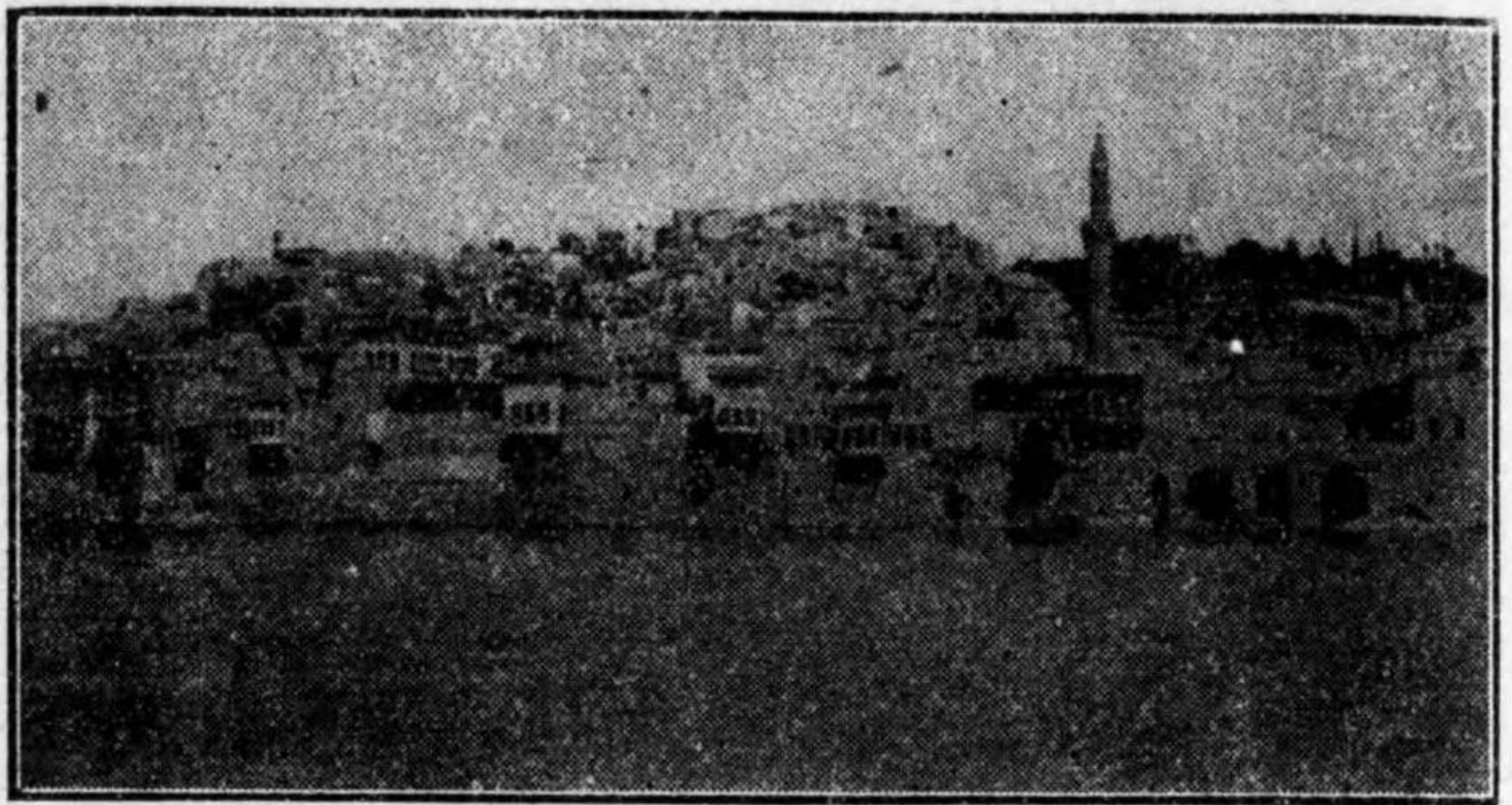
險惡ある高嶺と深谷とより成つて居る。歴史に有名なるユーフライト及びチグリス兩河の水源地である。氣候は寒烈で、河谷には小麦、米、煙草、野菜を産するのである。その南方の土耳其領クルヂスタンとを合はせて面積が十九萬平方吉米である。アルメニヤには主としてアルメニヤ人が、クルヂスタンには半遊牧民なるクルド種族が住んで居る。此の地方は目下露土兩軍の交戦地帯で、露領高架索に接近するエルゼルムはユーフライト河の源流カラスーの左岸八吉米の高地に位し、土國軍團の所在地で堅固なる要塞を有し、人口は約十二萬に達して居る。

同市と同じく兵要上、樞要なるものは波斯に接するヴァン市であるが、同名の湖畔に位し、人口は約六萬で、附近の地は頗る肥沃を以て聞え、多く棉花を産し、土國軍團の所在地である。

クルヂスタン中第一の都市はチアルベキルで、阿刺比人は之をアミツドと稱し、チギリス河の右岸の高地に位して居る。人口は約八萬を算し、北部波斯及びアルメニヤとの交通上の要路に當つて居る。土人はケレックと稱する一種の筏を利用し、モスールを経てバグダッド迄下るのである。

(3) メソポタミヤ

メソポタミヤは『兩河間の地』と言ふ意味で、即ちチギリス及びユーフラート兩河流域一帯の地を稱するのである。阿刺比人はその北部をエルゼジール、その南部をイラック・イアラビと呼び、一般に段丘と低平地より成つて居る。太古バビロン及びアッシリヤの榮えたる土地であるが、今は全く荒廢して、僅かに沿岸の一小部分に市邑の散在するを見るのみで、殆んど全部は曠原沙漠に化して居て、ベ

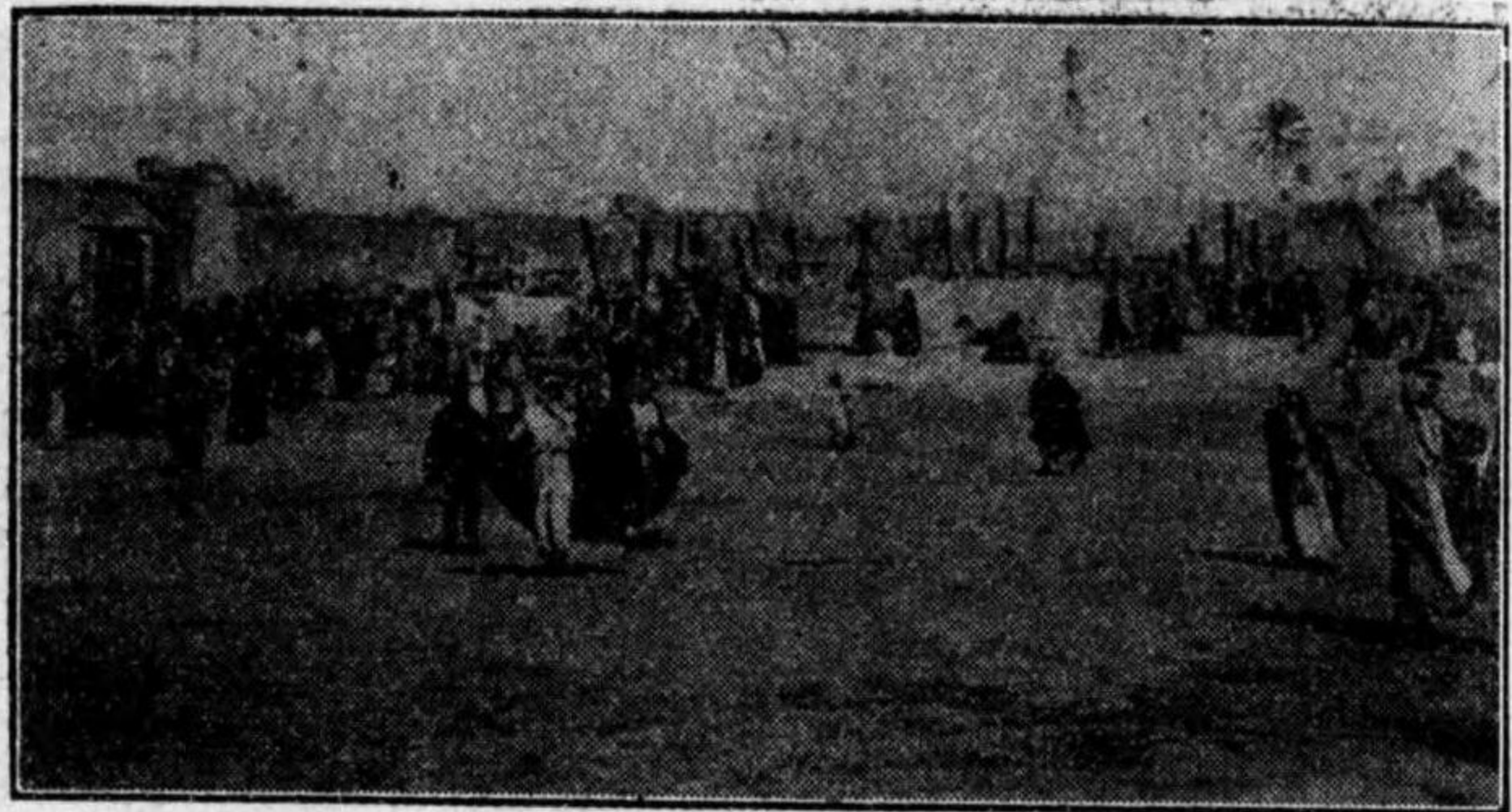


メソポタミヤの左岸河トラーフー

ドウインと稱する遊牧的阿刺比種族が天幕生活を營んで居るのみである。氣候は北部は溫和で降雨も多少あるが、南部は常に乾燥して居て暑氣強く、バグダッドの如きは已に二月の交に室内の溫度華氏の八十度を示すのである。交通頗る不便で、バグダッドよりシリヤのアレッポ若しくはダマスクスに到るには、單に駱駝隊を利用するの外なく、而も約四週間の沙漠旅行を繼續せねばならぬ。されど元來此の地方は地味の膏腴なるを以て世に知られて居るが、バグダッド鐵道の開通と共に灌漑工事にして成らば、往古の繁榮を復活し、世界無二の殖産地たるの望みが

ある。是れぞ獨逸が早くも茲地に着眼し、バグダッド鐵道を経営して、將來に於ける獨逸民族の發展地たらしめんとするの企圖を有する所以である。されど今回の歐洲戰爭の結果、或は此の計畫が遂に水泡に歸するかも知れぬ。

メソポタミヤの面積は三十七萬平方吉米で、我が日本帝國の本部に等しいのであるが、その人口は僅かに一百万を出てぬのである。而もその最多數は遊牧的阿剌比種族で、土耳其人の如きは、唯その少數が北方に住んで居る。従つて又都市の如きも極めて少く、僅かに指を屈する程である。されどチグリスの左岸に位するバグダッド市は人口十四萬以上に達する一大都會で、往昔アバジッド朝の時頗る隆盛を極め、一時回教文化の中心と爲り、教王の所在地であつた。今日でも尚波斯及び印度との貿易交通上樞要の地位を占め、貨物集散の中心點である。各國の領事館もあり、又土國軍團の所在地である。是より下流バスラ港迄四百三十



バシラのノムハツト門(ヒル市)

吉米の間には小汽船が定期に往來して居る。歴史に有名なるバピロンの廢市は此の地より二日行程のユーフライト河左岸のヒルレ市附近にある。又その北西には回教徒の聖地ケルベラ市があるが、その人口は約六萬五千で、常に巡錫者の足跡を絶たぬのである。

バスラ港はチグリス及びユーフライト兩河の合流なるシャット・エル・アルブ(即ち阿剌比河の意)の右岸に位し、波斯港を距つること百吉米であつて、バグダッド鐵道の終點として豫定せられて居る。人口は約八萬を算し、英國の汽船が定期に孟買との間

を往來して居る。此の地方は昨今英土兩國間の交戦地であるが、若し英國が永久に此の地を占領する様な事にもなれば、獨逸のバグダッド鐵道計畫に於ける一大打撃である。

チグリス河中流の右岸に臨みてモスール市がある。人口は約七萬であるが、世にムスリン織と稱せらるゝものは本と此の地の名産であつたので、その名を得たのである。即ちムスリンはモスールの轉訛したのである。今日はその製造も大に衰へたのであるが、尙優良なる羊毛の産地として知られて居る。チグリス河を距て、その對岸にアツシリヤの舊都ニネベの廢址がある。又その下流にはアツシルの廢市があり、今より約三千年前には、一時繁榮を極めたる地方である。ユーフラート河畔には今は更に見るべきの都市が無いが、その上流にビレヂツク市がある。北シリヤのアレッポよりメソポタミヤの北部に至る重要なる渡河點

で、バグダッド鐵道は已にその附近迄達して居る。此の市とヂアルベキルとの間にウルファ市があるが、口碑にアブラハムの誕生地として傳へられ、歴史上興味多き土地で、今尙その靈廟がある。

要するにメソポタミヤには到る處に歴史上の名所舊蹟があるが、遺憾ながら一茲に述ぶるの暇が無い。

(4) シリヤ及びパレスチナ

シリヤはその南方のパレスチナとを合せて面積二十一萬八千平方吉米で人口が二百八十萬餘であるが、誰しも知る如く、此の兩地方は太古フエネキヤ及び猶太國の榮えたる土地である。地味の肥沃で物産の豊富なるを以て知られて居る。特に小麥及び大麥に適し、此の外扁豆、麻、胡麻の類も主なる産物である。氣候は



一年を通じて温暖であつて、その中部のベイルート港の如きは十二月末の温度が我が國の初夏と同様である。メソポタミヤが坦々たる平地であるに反し、此の地は地中海に沿うて歴史に有名なるレバノン及びアンチレバンの併行山脈が帶狀を成して北より南に向つて走り、一帶の臺地を形成して居る。されどバレスチナに於ける死海の谷地は世界の最低地で、實に地中海の水面より低きとが一千二百尺である。最も重要な都市は、ダマスクス(阿刺比人は之をエシユ・シヤムと稱す)で、人口約二十五萬を算し、土耳其帝國内屈指の大都會である。往古は猶太人の繁榮した土地であるが、今は阿刺比人がその住民の最多數を占めて居て、市街の體裁も阿刺比亞式である。世にダマスの名を以て珍重せらるゝ優美なる絹織物の産地である。

バレスチナの首府エルサレムは、人も知る如く基督昇天の地で、宏大なる靈廟がある。その附近には基督教各派の寺院があるが、常に巡禮者の足跡を絶たぬのである。また土國軍團の所在地で、南部土耳其の重鎮と爲つて居る。

此市より短距離の鐵道に依りて連絡するジャファ港は人口五萬であつて、ベイルートに亞ぐ地中海の要港である。その北方のハイファ港には、ダマスクスより回教の聖地メツカに到る所謂ヘジャス鐵道の支線が通じて居る。

シリヤ第一の貿易港はベイルートであるが、人口は約十九萬を有し、各國の領事館もありて却々繁華な町である。此の市は佛國經營の『シリヤ鐵道』の起點であつて、リバノン山を踰えて南はダマスクスへ、北はアレツポに通ずるのである。又此の市の東方のリバノン山間に、リバノン自治縣なるものがある。その面積は三千一百平方吉米で、人口は約二十萬を算し、その最多數は耶蘇教徒で、一種特別の所謂リバノン教會なるものに屬して居る。千八百六十一年に英佛の援助に

より土國政府より自治權を獲取し、その知縣は必ず基督教徒を戴く事になつて居る。此のリバノン人は古來頗る勇敢なるを以て知られて居るが、今尙固有の風俗習慣を維持して居る。

(5) 土領阿刺比亞

阿刺比亞の内部は殆んど全く不毛の砂漠より成つて居ると同時に、盡く皆土帝の主權下に屬して居らぬが、土領阿刺比亞とは紅海の東岸に瀕して居て、北はアカバ灣より南はハブ・エルマンテブ海峽に達する帶狀形の地方を謂ふのである。土國は行政上之をヘジャス及びエーメンの二州に分けて居る。地勢は紅海沿岸より内地に入るに従つて、丘陵到る處に起伏し高地を形成して居る。地味は極めて不毛磽确で、氣候は一年を通じて熱帶的特質を示して居る。その面積は四十四萬

一千平方吉米であるが、人口は僅かに百萬であつて、殆んど全く阿刺比亞人である。都市の如きは指を屈する程も無いが、ヘジャス州には回教徒の最も神聖視するメヂナとメツカとの兩市がある。

即ちモハメツドの墓廟の所在地で、名高いメヂナ市は人口約十一萬を算し、ダマスクスを距つること八百五十吉米である。巡禮鐵道の名を以て知らるゝヘジャス鐵道は、今ダマスクスより此市迄開通して居る。メツカは其南方三百八十吉米の地に位して、ヂツデ港より東方九十六吉米であるが、モハメツドの降誕地を以て世に聞え、壯大なる寺院がある。世界の回教徒は是非一生に一度は參詣をする筈になつて居る。此の地には回教徒以外の者は絶対に足を容れるのを許させぬのであるが、我が日本人で此の靈地を訪ふたものは恐らく未だ無からうと思ふ。エーメン州は慄悍なる阿刺比亞人の住地であつて、常に叛亂の絶えぬ土地での

るが、その首府はサナアと云ひ、人口約七萬を算し、海拔二千百三十米突の高地に位して居る。ホダイダ港がその出入口であるが、その人口は四萬五千である。その南方に優良なる珈琲の産地モツカの小港がある。

目下土耳其領と埃及領との境界を成して居るものはシナイ半島であるが、此の半島は以前土耳其が之を占領せんとした事があつたが、英國が強硬なる抗議を唱へて遂に埃及の領土内に加へたのである。最近英國が占領したるアカバ港はその半島の東方に位して居て、埃及とヘジャス並にシリヤ方面よりの交通上最も重要な地點である。蓋しシナイ半島には舊約全書に有名なシナイ山が横はつて居て、又その北方の地中海に濱したる部分は不毛礫确の沙漠であつて、交通に頗る不便なのであるが、土耳其はアカバを占領せられた以上は、止むを得ずシナイ半島の北方より埃及に向つて進軍せねばならぬのである。

(6) 首府コンスタンチノーブル

君府は世界に於ける最も古い都市の一つで、その始めは希臘人に依つて建立せられたので、西暦紀元前六百五十八年即ち二千五百年も以前の事である。最初はビザンツと稱せられたが、紀元後三百二十八年羅馬皇帝コンスタンチンが茲地に一大都會を經營するに及んで、コンスタンチノポリス即ち『コンスタンチンの都』の名を取つたのである。

その後羅馬帝國が東西に分裂すると同時に、東羅馬帝國の首府と爲り、ヤスチニアン帝(五二七年乃至五六五年)の時、大に土木を起して市の美觀を加へた。世に有名なるセント・ソフィアの大寺院の建築せられたのは、實に此の時であつた。然るにその後、土耳其の爲めに占領せられ、その帝國の首府となつたのは、前に



コ ン ス タ ン ブ ル

も述べた如く、千四百五十三年の事である。  
 此の市は深く灣入する金角灣に依つて、二市區に  
 區劃せられて居る。即ちその灣の南側に舌頭的形状  
 を成し、マルモラ海に沿ひて突出するものが、古  
 來の君府であつて、土耳其人の所謂スタンプールで  
 ある。土耳其人は主として此地に住んで居るのであ  
 るが、従つて市街の體裁も亦東洋風を帯びて居る。  
 今は別に見るべきの建築物も無いが、回教の寺院は  
 大小合せて、實に八百九十一の多きを算して居る。  
 彼の有名なるセント・ソフィアの大寺院は、今は多少  
 の改築を加へ、ハギア・ソフィアの名を取り、回教の本



プ ル 府 全 景 (一)

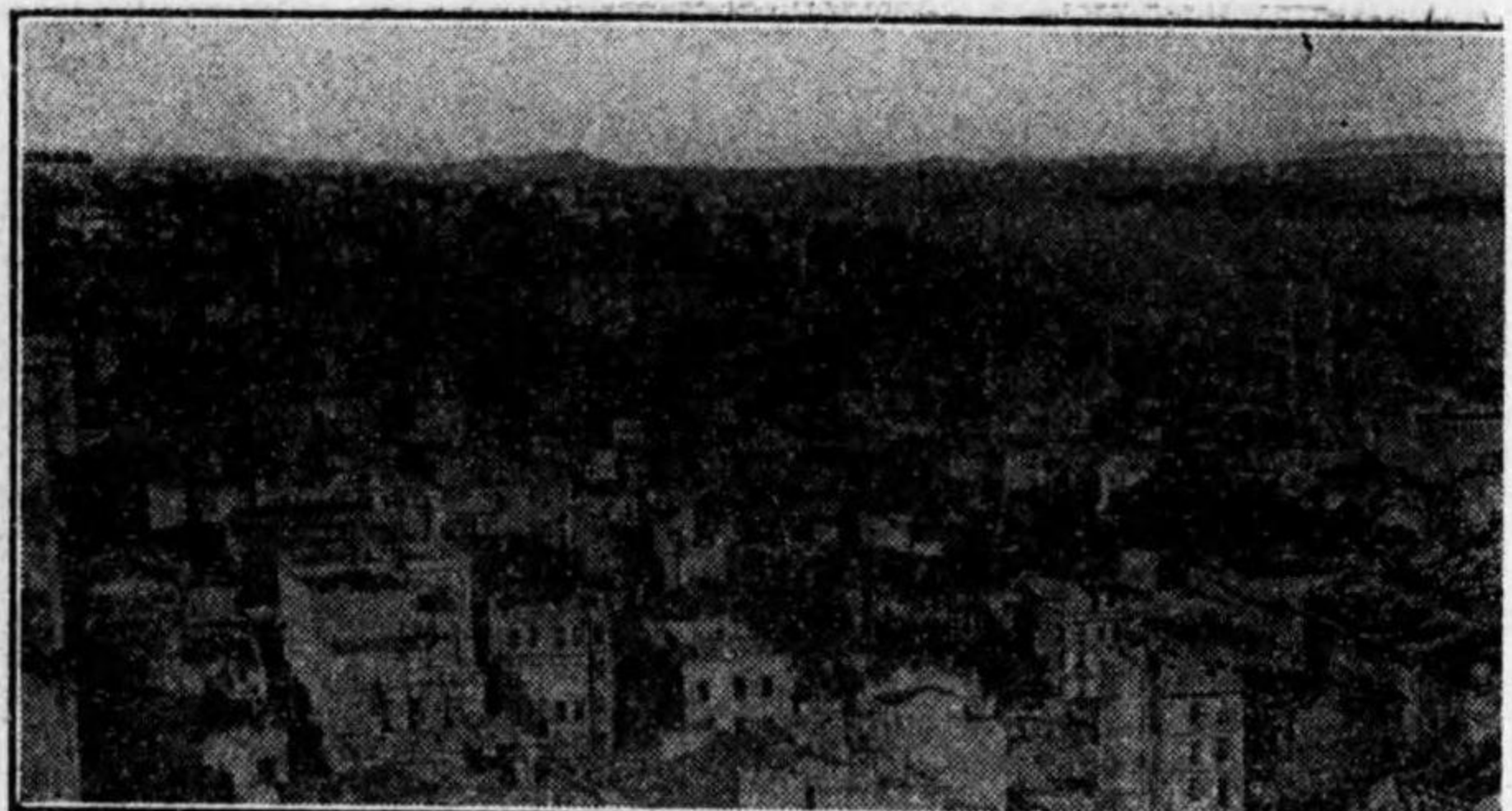
山と爲つて居る。  
 外國人並びに土國臣民中の基督教徒は、主として  
 金角灣の東北側なるペラ及びガラタ兩區に居住し、  
 茲地には各國の公使館を始め銀行、學校、郵便局、  
 商店、ホテル等があつて歐風の市街を爲して居る。  
 スタンプールと長き船橋によつて聯絡して居る。又  
 ポスポラス海峡を距て、その對岸には外市スクタ  
 リがあつて、又之に接近してバグダッド及アナトリ  
 ヤ鐵道の起點なるハイダルバシヤがある。  
 普通君府とは此等の外市をも合はせて稱するので  
 あるが、その人口は約百三十萬で、本市は九十三萬



コンスタンチヌポル

を算するのである。その内土耳其人が五十萬、希臘人が二十萬、アルメニヤ人が十八萬、猶太人が六萬八千、歐洲人が七萬を算し、外國籍に屬するものが都合十三萬人である。

市街は一般に家屋が櫛比して居て、甚だ不潔であるが、稍や小高き處に登りて市街を目下し、更にボスポラス海峡を距て、遙かに亞細亞大陸の遠山を雲煙模糊の間に眺望した時は、誰しも快哉の叫を禁じ得ぬのである。而もボスポラス海峡の風景は又格別である。その沿岸の水清らかなる所に臨んで、人工の美を極めたるスルタンの離宮や嬪宮が數多く立ち列



マルボラ府全景

んで居る。ボスポラス海峡は土耳其人之をカラ・デニス・ボガスと呼び、黒海とマルボラ海との水道であつて、その延長は三十一吉米、幅の最も狭き處は六百六十突米なるも最も廣き處は四吉米に達し、水深は五十乃至七十米突である、黒海の水面は地中海よりも稍や高いので、潮流は随分急な方ではあるが、如何なる巨艦と雖も自由に往來が出来るのである。

マルボラ海より多島海に出づるダルダネル海峡は太古の歴史に有名なるヘレスポントであるが、その延長は六十吉米で、幅員は一吉米乃至七吉米



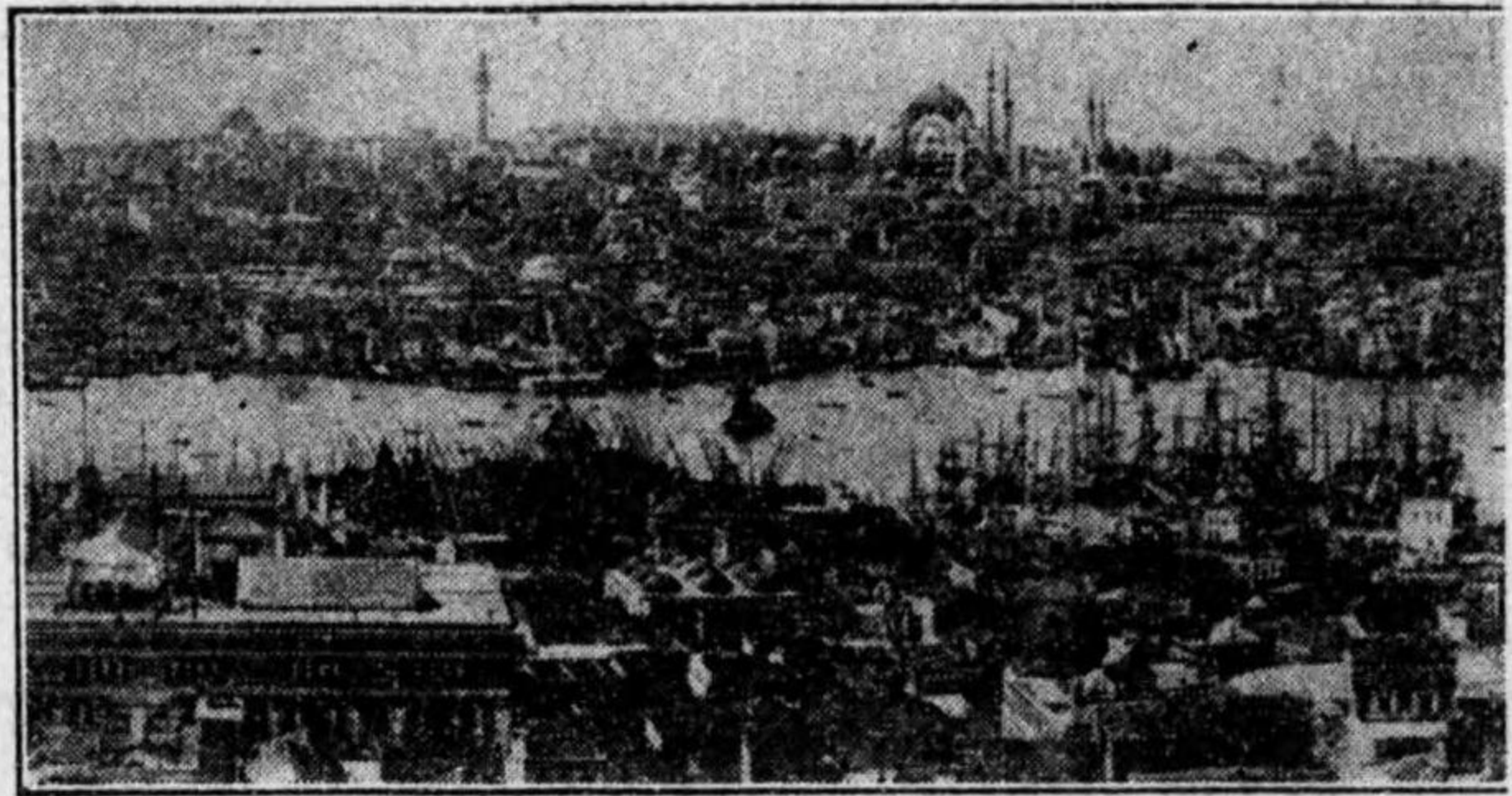
コソノダシノ景

半である。その東端に位するガリポリは君府の外港とし、又土國海軍鎮守府の所在地として頗る樞要なる地位を占めて居る。

### 第三編 民族的觀察

#### 一 民族性

土耳其人は前にも述べたる如く、本来鞑靼人や蒙古人など、同一血族であつて、學者の所謂ウラル・アルタイ族、即ち普通蒙古人種として呼ばれるものに屬して居るが、其實今日のオスマン土耳其人は、

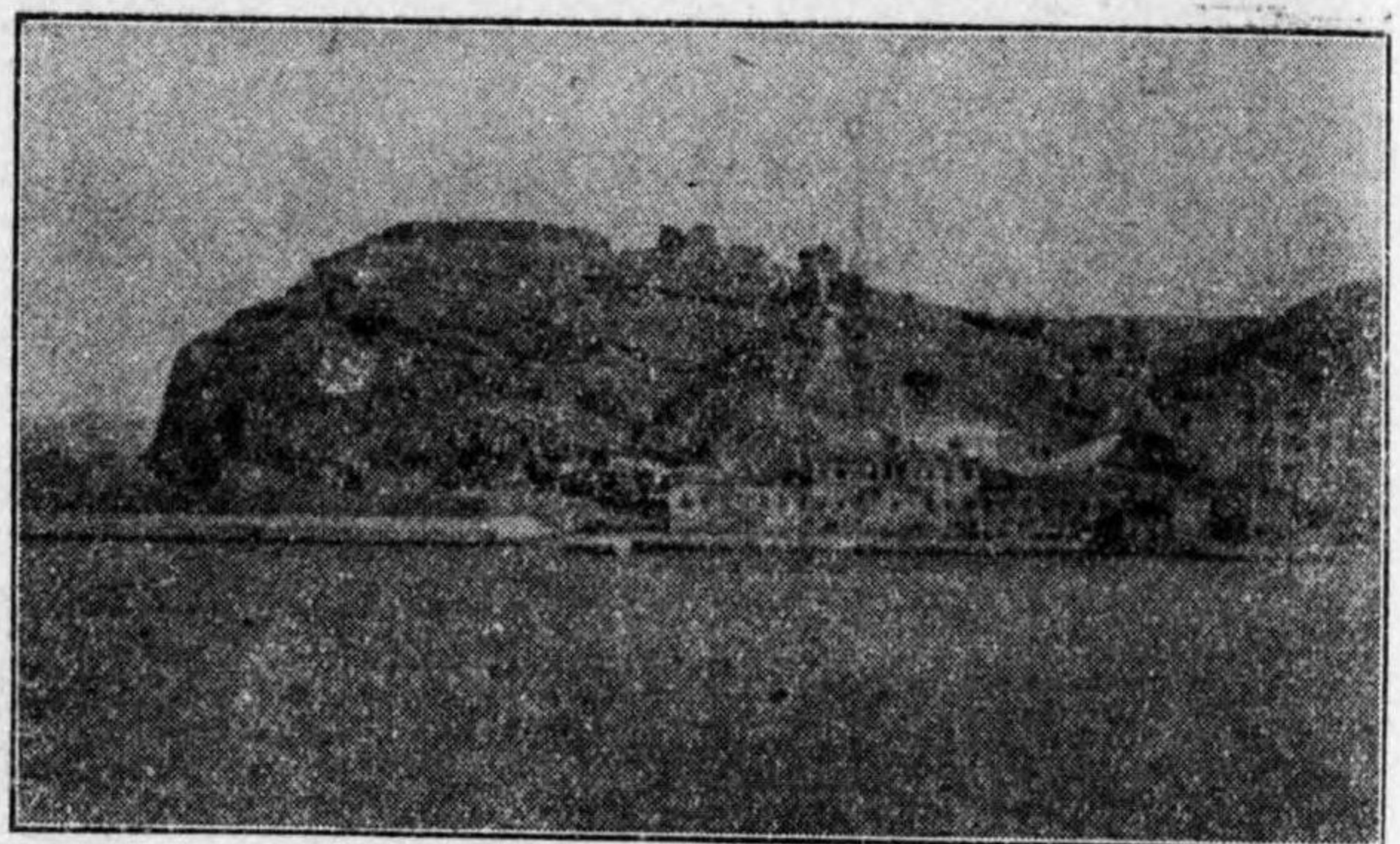


ブルサ府全景 (三)

概して本来の特徴を失ひたる混血種である。その容貌に就て見ても、鞑靼人や蒙古人のタイプは殆んど無く、却つて上流社會のものは、所謂高架索タイプであつて、寧ろ歐洲人の方に酷似して居る。即ち色白く鼻高く一般に美貌の方である。是れと云ふのは畢竟彼等が歐洲民族の住地を征服して之と血液を混合したのと、又多妻主義の所から高架索地方の美人を多く妻妾とした結果である。故に小亞細亞の内地に在りて専ら農業或は牧畜に従事して居る者は、今尙多少本来の特徴を存して居る。即ち頭短く、顔長く頬骨張り、唇厚く、鼻隆起し、眼は細きか若くは出目

の方で、身長は中で身體は肥満性である。就中土耳其人に依りてもユリツク或はゲヨチエブと呼ぶる、遊牧民の如きに至つては、殆んど露西亞などに住んで居る鞮鞞人と大差が無い。

斯くの如く土耳其人はその血液に於てこそ大に混合して居るが、彼等の多數は尙依然としてその本来の民族性を失はずに居る。そこで少しくその性質に就て述べようが、第一彼等は極めて正直で虚言などはたとへ冗談にも言はぬ、又何處までも律義一方で少しも曲つた事はせぬ。特に金銭上の事にかけては頗る正しく、決してごまかすなど、云ふ様な事が無い。是は一面には回教の感化から來たつて居るのでもあらう。今一例を挙げれば、此處に土耳其人の一果物商がありて、若干斤の檣子を賣ると假定するに、彼は若しも秤目に間違ひでもなからうかと氣遣つて、必ず一個は餘計に加へるのである。



ボスポラス海峡入口

彼等は又至つて質朴であつて、御世辭などは決して言はぬ。加之又不言實行の方で、何事も黙つてすると云ふ美風がある。土耳其の俚諺に『犬は吠えるが駱駝隊は絶えず歩む』と云ふのがあるが、是は一面に於て彼等の性質の特長を語るものである。彼等は又至極寛大であつて、容易に怒る様な事が無い。下級のものでも大聲を發して喧嘩口論をするなど、云ふ事は殆んど見ない。要するに土耳其人は極めて温良な平和的國民で、洵に太古の民と云ふ風がある。此の事に關しては佛國の文豪ピエール・ロチも其の名著『瀕

死の土耳其』に於て次の如くに述べて居る。

噫、アナトリアの奥深くに埋れたる過去の町々、緑野の中の白塔と黒扁柏とを廻らしたる村々は、如何ばかり平和安静なるぞ、その生活は如何ばかり正直質樸なるぞ。労働者たると技工たるとを問はず、日に五度跪拜の爲め寺院に詣で、夕さり來れば、祖先の墳墓の畔、葡萄棚の蔭に坐して、長夜の夢漫漫と煙草を燻らすを見る。是れ土耳其人日常生活状態に非ずや、然るに西人は彼等を以て慄悍にして、戦を好み、動もすれば虐殺を事とする野蠻の民と爲す、是れ果して何の意ぞ』と。

尤も、彼等は往々此迄アルメニヤ人や勃牙利人を虐殺したことはある。されど是は全く宗教上の熱狂より來たつたもので、彼等本來の天性では無い。吾人は寧ろ此の平和的にして且つ温良なる彼等を刺激して怒らせたる基督教徒を非とする。ピ



上街府ルプーノチンタスニコ

テール・ロチ氏の説に賛同せざるを得ぬ。

尙此の外土耳其人の美點を擧げると、特に慈悲深く且つ義侠心に富んで居る一事である。彼等は老人や弱い女子供を憐はることとは勿論であるが、特に貧しき者に對して親切なることは感ずる外は無い。若し乞食が往來で憐みでも乞へば、さつと多少に限らず、之に金錢を惠むのである。若し持合せの金が無かつたならば、『どうぞアラアの神が汝に恵まれる様に』との優しき言葉を遣して往過ぐるのである。決して無下に



拒絶する様な事はしない。  
 又旅客などが途方に困つて一夜の宿を頼むことがあれば、彼等は必ず心善く之に應ずるばかりでなく、出來得る限り手厚く之を接待する。而かも彼等は之を以て自分の榮譽の如く又義務の如くに心得、決して客から返禮などを受け取らぬ。加之又彼等は總ての動物に對しても至つて情深く、殺生などは素よりせぬ。若し狩人が生きたる鳥などを捕へて手にして居るのを見れば、彼等は必ず之を購ひて放して遣るのである。此の事に就てはピエール・ロチ氏も書いて居るが、なんでもブルツサの回教聖地には鳥の爲めに一つの病院が出來て居て、最早老衰して冬の初期に暖地に飛び去ることの出來ぬものなどをば收容したり、又負傷して居る者に繃帶を施し、或は義脚さへも作つてやると云ふ事である。それに又彼等が犬を愛護する事の非常なるは、有名な話であるが、之が爲め犬



寺アイフソ府ルプーノチンタスニコ  
 (るらせ稱と粹の築建式ンチンサに建創の紀世六)

に取つては土耳其は極樂郷と見えて、到る處の町に澤山横行して居る。或る時アルメニヤ人が之を征伐しようとした爲めに、大變な騒動が起つて、土耳其人と鬭争をしたと云ふ事である。  
 要するに土耳其人が概して正直で、質樸で、廉直で、慈仁で、而かも寛大な氣品の高きゼルトル・マン風のあることは、一般土耳其通の定評である。  
 然るに、何れの國民にも、その性質の美點もあれば、又弱點もある。今土耳其人の弱處

に就て見るに、第一に彼等が概して怠惰で労働を好まず、従つて又因循姑息で、進取的氣風に乏しい事である。彼等が常に口癖にするヤワシ、ヤワシと云ふ言葉は、我が日本語に何んと譯して善いやら分らぬが、英語で云へば、バイ、エンド、バイの意味に近い。丁度露西亞人の口癖にするニチエゾオと同様、極めて事に無頓着なるを示すのであるが、或る土耳其通は、土耳其人の特質は此の言葉が一番善く代表して居ると評して居る。

彼等は又智力が甚だ遲鈍で敏捷を缺き、推理力や創作力が更に無い。特に數理上の智能に乏しい。故に彼等は精神上に、將た又物質上に於ても世界の文明に是と云ふ貢獻をした事が無い。多少建築上の美術などに於て見るべきものが無いても無いが、それとても皆多くは波斯や阿刺比亞から輸入したので、更に創作的で無い。是と言ふのも、丁度前に述べた美點の多くが彼等の宗教から來て居ると同



部内の寺ア イフソ府ルプーノチンタスニコ

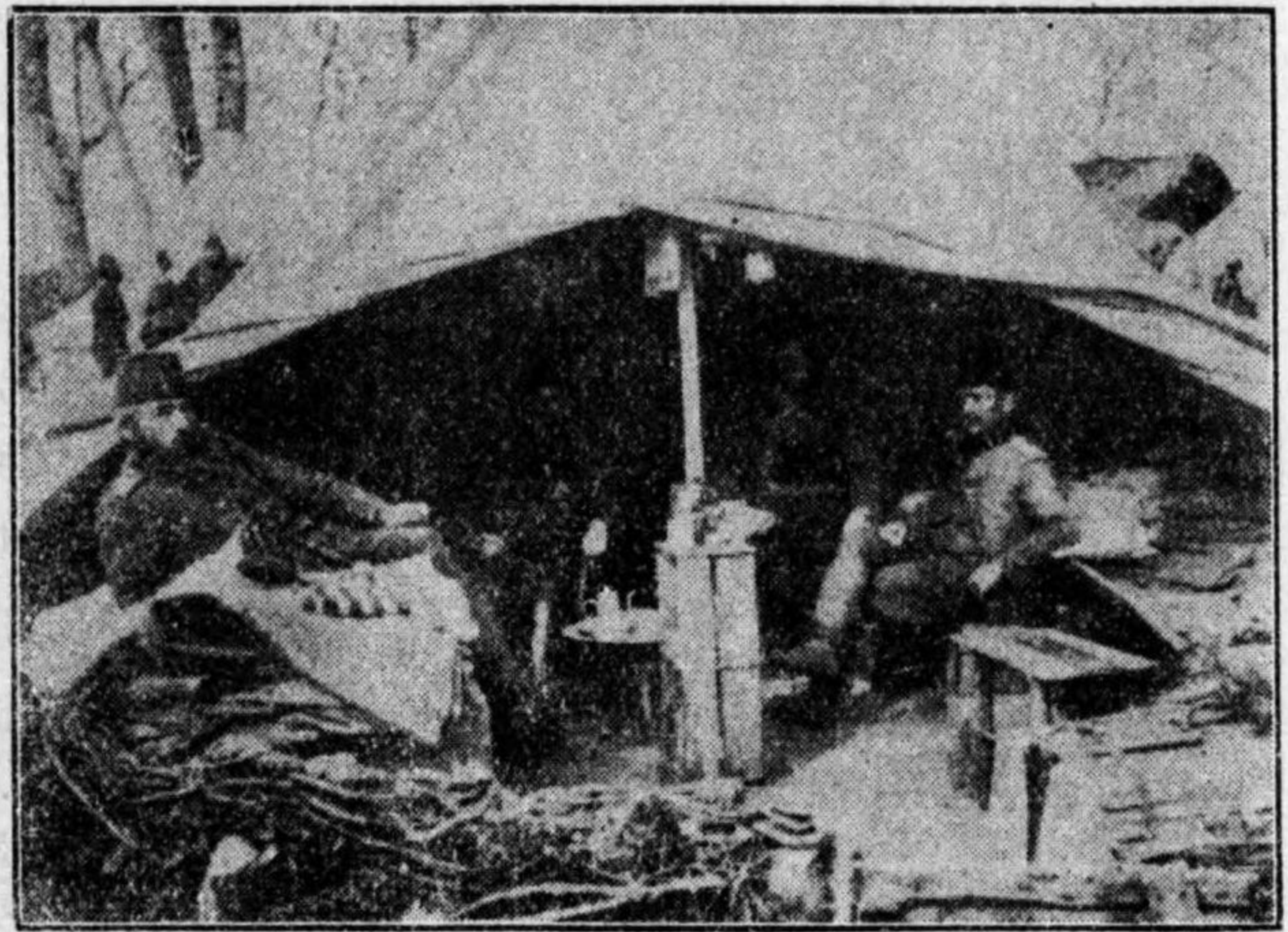
然るに獨逸のフオン・デル・コルツ將軍や、イムホフ將軍などは、土耳其の兵士

様に、その弱點も亦回教の宿命説や又極端なるストイック主義より由來して居ると思ふ。蓋し彼等はイスラム教の信條を墨守し、何事も之を運命と諦め、現狀に甘んじて之を改善しようと思ふ様な慾望が無い。是れ即ち彼等が因循姑息に流れて進取的氣象に乏しい主たる原因である。茲に於て吾人は土耳其の爲めに回教亡國論を唱へたくなる。

を教育してその最良なる成績を擧げたる所より、『苟も兵士にして斯くの如く世界優秀の者たるを得る以上、何事を教へても出來ざる筈は無い。實に彼等の前途は頗る有望である』と云うて非常に稱揚して居る。果してその説の如くなるであらうか、吾人は姑く之を疑問として遺して置く。

## 二 風俗習慣

次に述べ様と思ふのは彼等の風俗習慣である。土耳其人の社會的關係は頗る平民的であつて、世襲的貴族とか門閥など、云ふ階級制度は更に無い。唯スルタンの皇族を除くの外は、大臣であらうが、太守であらうが、社會的關係に於ては毫も平民と差別が無い。故に又奴隸の身より起りて、宰相と爲るものもある代りに、一度大臣に爲つたものでも、その位を去れば、只の平民と同様の生活を營むのである。



校將其耳土の中陣

次に土耳其人には、名ばかりがあつて姓と云ふものが無い。故に我々の姓と言ふ様な場合には何の何某の子と云ふのである。然も下級の者になると、絶対に名すらなく、只綽號のみで通用して居る。次に家族制度であるが、普通世人は回教徒と云へば丁度モルモン宗と同様に、誰れでも皆一夫多妻主義である様に考へるが、是は大なる誤解である。本來教祖モハメッドは四人迄は本妻を持つても差

支ないとして之を許したのであるが、その實之には條件を附して居る。即ち一人の妻に付き、必ず一軒の家を與へ、決して多數同居せしむることを許さぬ。是は閨門の不和の起るを顧慮したのである。それ故富有の者でない限りは、一人以上の妻帯が出来ぬのである。されば事實に於て多數の土耳其人は矢張一夫一婦主義で、然も貧乏人になると一人の妻すらも持つ事が出来ずして、一生獨身で暮らすものもある。因に云ふが土耳其人が妻を娶るに當りては、多額の結納金が要る。言はゞ金を出して買ふと同様で、支那や朝鮮の習慣と異ならぬのである。之は世に知られて居る話ではあるが、土耳其の婦人はハーレムと稱して婦人のみに限られたる房室に閉込められて、一切夫の外は男子に見ゆるとが出来ぬ。又外出する時にはチャールチャツフと呼ぶ外衣を深く身に纏ひ、更にその面部には黒き透布を垂れ、斷じてその顔面を露はすことが出来ぬ。聞く所に據ると土國の革

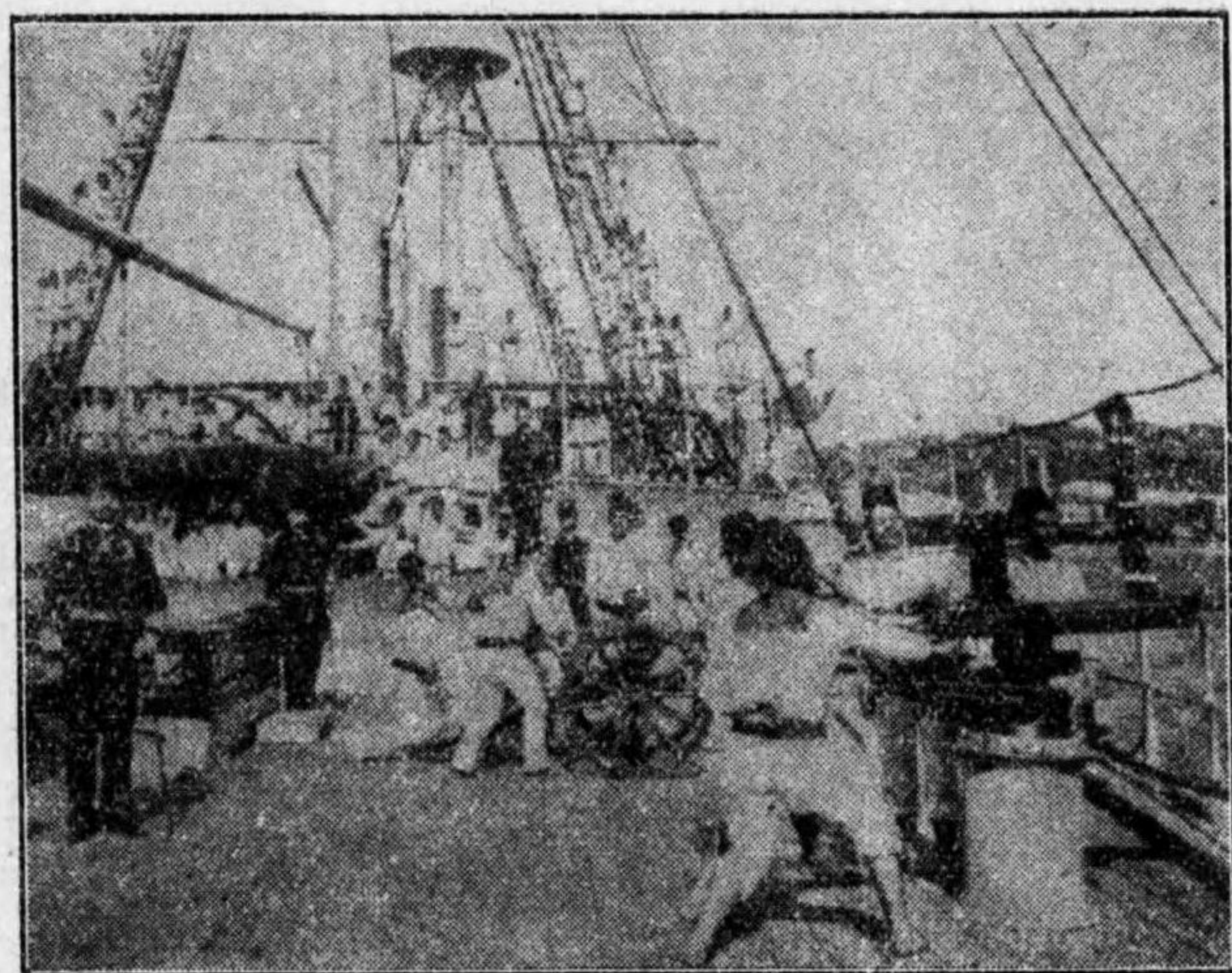
命以後、君國などのハイカラ婦人中には、此の慣習を破るものが追々出来て来た様子であるが、されど宗教や社會の制裁に壓せられて、容易に行はれさうも無いと云ふ事である。

兎に角斯くの如き状態であるから、婦人の教育などは到底望むも得べからざるのである。されば一般に彼等の知識の程度の幼稚なる事は御話にならぬ。是は又一面に於て、土耳其に於ける文明の發達せざる一大原因を明かに語つて居る。

又此の國の慣習として男の子は、八歳迄ハーレムに於て母親と共に生活するが、回教徒の洗禮である例のサーカムシジョン(包皮切解式)を行ひたる後は、再びハーレムに入ることが出来ぬ。又女子は普通十六歳になれば結婚をするが、さうなれば一生、前に述べた如くハーレムの牢屋同様な生活を営まねばならぬ。夫と手を携へて外出するなどは愚か、一處の食卓で食事すら出来ぬ。されどこの様に言ふ

てしまへば、實に土耳其の婦人程、世に憐れむべきものは無い様であるが、又裏面に立入つて聞いて見ると、案外さうでも無い。なんでも回教の教義上、妻は夫より充分なる愛護を受くる特權を有つて居て、日没より日出迄は必ず夫はハーレムに入りて妻の御機嫌を取り、夜遊びなどは法律上絶対に出来ぬ事になつて居る。加之又、妻が夫を尻の下に敷くなど、云ふ事も随分有勝で、富有の家になると數多の女奴隸を置いて、妻は終日何事もせず、唯化粧や遊技などして安樂に暮すと云ふ事である。

併乍一般に婦人の境遇は憐れむべきもので、子無き妻は去らしめるし、又夫の氣に入らぬものは、唯一言の下に離縁せらるゝのである。要するに土耳其の將來に向つて、婦人問題は頗る重要な意義を有して居ると思ふ。それから土耳其の家屋の事に就て述べれば、概して木造或は土造であつて、そ



土耳其の海軍

の外部はちよつと西洋風であるが、内部は我が日本と同様に、椅子や寢臺などは用ゐなくて、床の上に坐臥するのであるから、床には一面に莫塵を敷きつめ、冬はその上に土耳其の名産の絨氈を布く。而して室内の一部分にカナビと稱して布張の低きソファの如きものを備へ、その上に坐るのである。吾輩は土耳其に旅行せぬ前迄は、たとへ坐ると云つた處で、多分わづらをかゝるのであらうと思つて居たが、その實際

を見て、全く我々と同様にチャンと足を折つてかしまるのである事を始めて知つたのである。恐らく此の慣習は世界中日本と土耳其だけであらうと思ふが、して見ると、どうやら我々は土耳其人と人種上餘程近い關係がある様に考へられる。

土耳其の家屋の特色は、男房即ちセラムリックと女房即ちハーレムとの二部より成り、厚い土壁で區劃されて居る事であるが、その中間に唯一つの入口があつて、常に戸が嚴重に閉ざられて居て、毫も外部から裡を窺ふ事が出来ぬ。

尙此の外種々面白い話もあるが、到底此の小冊子には書き盡されぬから、唯一の顯著なるものに就て語らう。彼等が食事の時、一切箸や肉叉を用ゐずに、唯右の指で攫んで食べる事は、印度人なども同様であるから別に珍らしくも無からうが、甚だ尾籠な話ではあるが彼等は廁へ行つて、紙を用ゐずに左の指で汚物を拭ひ取るのである。但し彼等の爲めに辯解して置くが、廁の中には、必ず水指が

あつて右の手で之を取り左の指を能く洗ふのである。それ故彼等の左の指を不淨の指と稱して、決して之で食物を攫かまぬのである。尤も千萬な事である。

それから又土耳其人が男女共に一週に一度必ず入浴することであるが、是は回教の戒律から來て居るので、到る處の市邑に寺院同様、必ず共同の大なる風呂場があつて、信徒は皆無料で這入れる様になつて居るが、是は土耳其風呂として知られ居る蒸風呂なのであるが、我々も度々這入つたが、却々氣持が善い。日本にも輸入したらば妙であらうと思ふ。

彼等の嗜好に就て言ふと、先づ第一に煙草と珈琲とを好んで飲むことである。粗末な家ではあるが、到る處に珈琲店があつて、彼等は之に這入つて、一時間も二時間も、のんきさうに往來などを眺めながら、煙草を煙らしつゝ、珈琲を飲んで居る。何でも西洋の珈琲店は本と土耳其のを真似たものだと云ふ話である。

「甚だ感心なのは彼等が一切酒を飲まぬ事である。是も矢張り回教の法律で嚴禁せられて居るからではあるが、兎に角泥酔者などは見たくても見えぬ。此の點になるとテンペランスをやかましく云ふ基督教國の方が遙かに劣つて居る。然るに近來ハイカラの土耳其人になると外國の酒は別であると稱して、葡萄酒や麥酒を大分飲む様になつて來たと云ふ事だが、一向感心しない。元來東洋人が兎角に西洋人に馬鹿にさるゝは、自國の美風を棄てゝ、西洋の惡習を真似るからである。同じ真似をするなら善い事を真似て貰ひたい。それに又土耳其には、大に改良を要する事が澤山ある。

先づ第一に改めて欲しいのは、時刻の事である。今だに彼等は回教曆を用ゐて居て、その月日が我々の太陽曆と全く違ふのは甚だ面白くないが、是は宗教上已むを得ずとしても、一日の時刻をば日没を以て零時と定めて、是より一時、二時、



河運大のラスバ

三時と算へるのであるが、日の長短に由つてその標準時が違ふ。然るに此の時間が汽車にでも何にでも一般に通用せられて居るのであるから、我々旅行者などは尠からず迷惑する。斯かる不合理なるものは全く廢して、西洋風にしたらよさうに思ふ。それから土耳其人の帽子の事であるが、是は誰しも善く知つて居る通り、例のフェッスと稱する赤い帽子を上はスルタンより下は乞食に至る迄、苟くも土耳其の臣民である以上は必ず之を被るのである。(阿刺比人やクルド人の遊牧民になると別に彼等固有の帽を用ゐて居る)それが妙なのは兵士でも巡查

でも皆一様に之を被るのであるが、是は固より悪習では無い。併乍如何にも彼等の頭腦が此帽子同様、一般に平凡で而も單調であるのを表白して居る様に見える。それから宗教上の習慣の中に、ラマザンの祭と稱して回教曆の九月一日から一ヶ月間斷食を行ふ事がある。その際には一切食物を取らぬのみでなく、水すらも口にせぬ。然るにそれは唯晝間だけの事で、夜になると平常通り食事をする。それ故自然晝眠り夜は起きて居ると云ふ様な慣習になつて居る。斯る衛生上有害なる習慣は宗教上とは言へ、斷然廢したら好からうと思ふ。歐化主義を標榜して居る青年土耳其黨が、果して之を改むる丈の勇氣があるかどうかは疑問であるが、先づ此邊の事から革新して往かなくては、土耳其の前途は甚だ暗黒である。徒に利權の回收だとか、やれ國威の振張だとか云うて、戦争ばかりを事として居るのは、大なる心得違ひでは無からうか。

## 第四編 政治的觀察

### 一 政體及び中央政府

土耳其は從來東洋的君主獨裁政治の好標本として世に知られて居たが、一九〇八年の革命により、全くその面目をば一新して立憲君主政體と化し、スルタンの無限的權能は憲法に依りて制限せられ、人民は議會に代表者を出して國政に參與することが出来る様になつた。而もその憲法の如きは、主として範を白耳義やその他の自由國に採つたので、餘程民主主義に傾いて居る。

土耳其の議會は元老院と代議院の兩院より成つて居るが、元老院議員は國家に功勞あり且つ國民に信用の厚き四十歳以上のものが皇帝によりて勅選せられ、そ



の任期は終身であつて、その人員は代議院の三分の一を以て最大限として居る。代議院議員は人口五萬毎に一人の割合で、満三十歳の公民が間接選挙法により、階級或は宗教の如何を問はずに選挙せられ、その現数が二百八十人である。

兩院共に毎年十一月より三月一日迄をばその開會期限とし、一般の決議は議員半數以上の出席を要し、憲法の變更は出席議員三分の二以上の多數決によるのである。法律案の提出權は原則として大臣の手に歸して居るも、若し兩院中の一院が法律の改正若しくはその立案に關する意見を提出する場合には、最初先づ之を皇帝に提出して若し皇帝が之を嘉納すれば、參議院に命じて法律の草案を制定せしめ、而して後之を兩院の討議に附するのである。要するに歐米一般の議院制度と大差が無いのである。

次に又内閣は、宰相、内閣議長、外務大臣、司法大臣、陸軍大臣、文部大臣、



内務大臣、大藏大臣、工務大臣、農商務大臣、社寺領大臣と又回教に關する宗教上の一切事務を司どる教務總監より成つて居る。此の外參議院即ちシユラ・イ・デヴレットと稱する我が國の樞密院に似て居るスルタンの顧問府がある。又會計検査院もある。

斯くの如く立法及び行政機關が一見整然として完備して居る様ではあるが、その實その多くは唯有名無實で、革命以前に比して内政上未だ著しき改善を示して居らぬ。是は創業以來日も尙淺き故でもあらうが、就中議會の如きは徒らに政争の具に供せられ、之が爲め却つて國內の紛亂をこそ助長せしめたるも、更に政治上の革新に貢獻する所が無い。又政黨と稱した所で、別に確乎たる主義や主張の定つて居るのでは無く、唯舊弊打破の名の下に私利を逞うせんとするに過ぎぬのである。是は獨り土耳其ばかりでなく、波斯にしる、支那にしる、凡そ東洋

一般の新憲政國に於ける通弊である。それと言ふのも畢竟未だ一般の國民が政治的思想に乏しいのと自治的素養が無いからであるが、その結果選舉の競争が激烈であつて、政府は又動もすれば惡辣なる干渉を行ふのである。少なくとも今日の状態では議會政治なるものが、果して土耳其やその他の東洋國民に適するや否やは疑問であると思ふ。

次に土耳其の内閣に就て見ると、革命以前に比すれば、稍やその組織も改善したが、更に統一なるものが無く、各大臣の責任が一向判然として居らぬ。その官職の如何を問はず唯勢力あるものが常に内閣の牛耳を握り、獨り專横を逞うするるのである。現に今日に在りては陸軍大臣のエンヴエールが、遙かにその勢力宰相を凌ぎ、殆んど獨天下の有様である。斯くの如き状態であるから常に閣員間の衝突が絶えずして、屢々その交迭を見るのである。加之又舊政朝以來の元老なるもの

があつて、何事も之に頼らねば行はれぬと云ふ様な情實もあるし、一方には頑冥なる回教僧侶の勢力が頗る優勢であつて、刷新事業に反對するのである。故に革命以來新政府の治績として見るべきものは、唯僅かに陸海軍の改革位が關の山で、土耳其の爲めに焦眉の急務たる國民教育や殖産興業などは、今尙依然として不振の状態である。

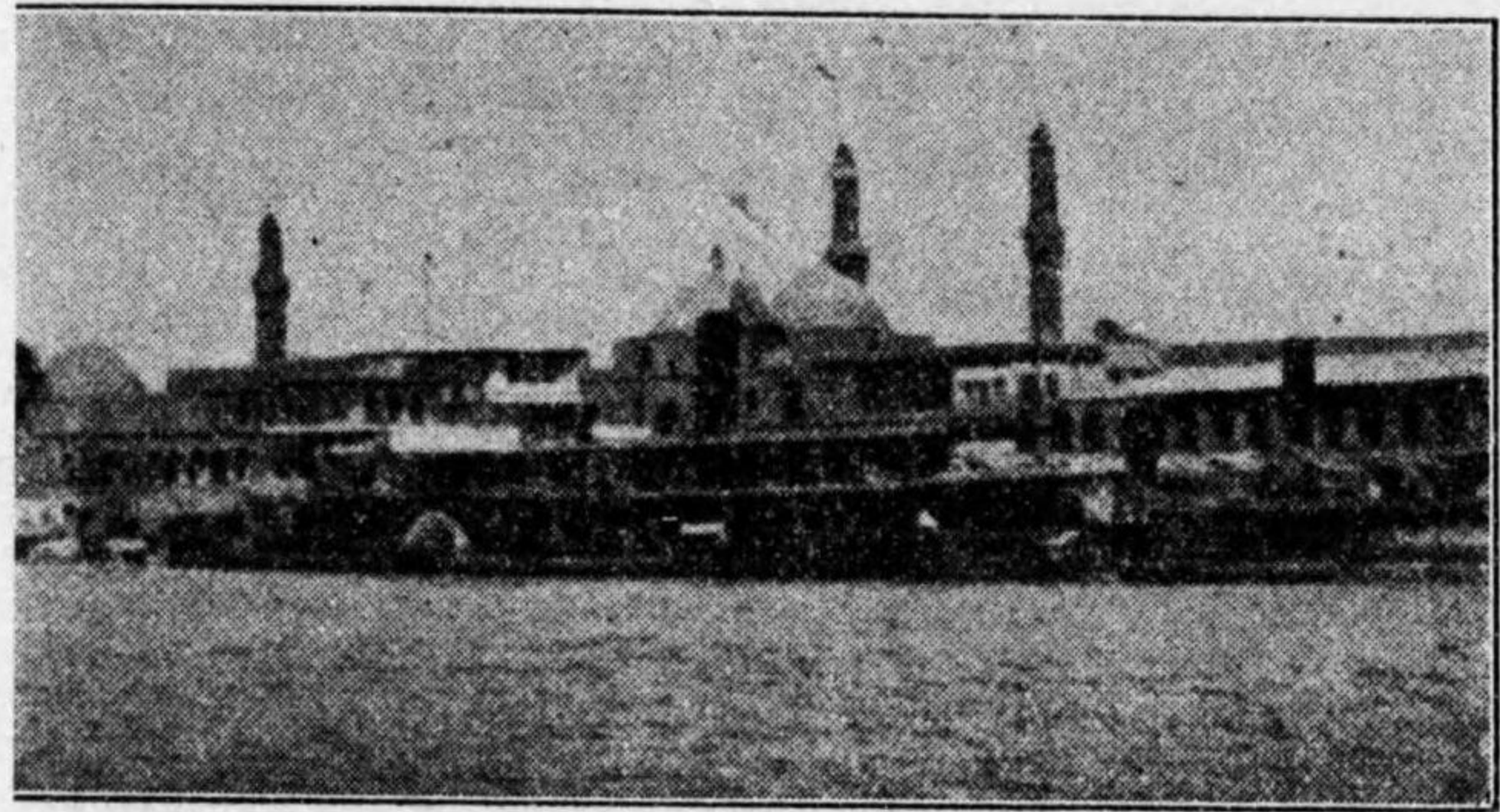
### 二 財政

特に又土耳其帝國の死活問題とも謂ふべきは財政であるが、青年土耳其黨の政權を握りし以來、財政の整理に力め、租税の徴收法を改善したり、或は經費の節減を行ふたりしたにも拘はらず、歳出は年々益々歳入に超過し、しかもその底止する所を知らざるの有様である。そは次の表に據りて明白である。(土國の會計年

度は翌年の二月末を以て終る、土貨一磅は邦貨の約九圓)

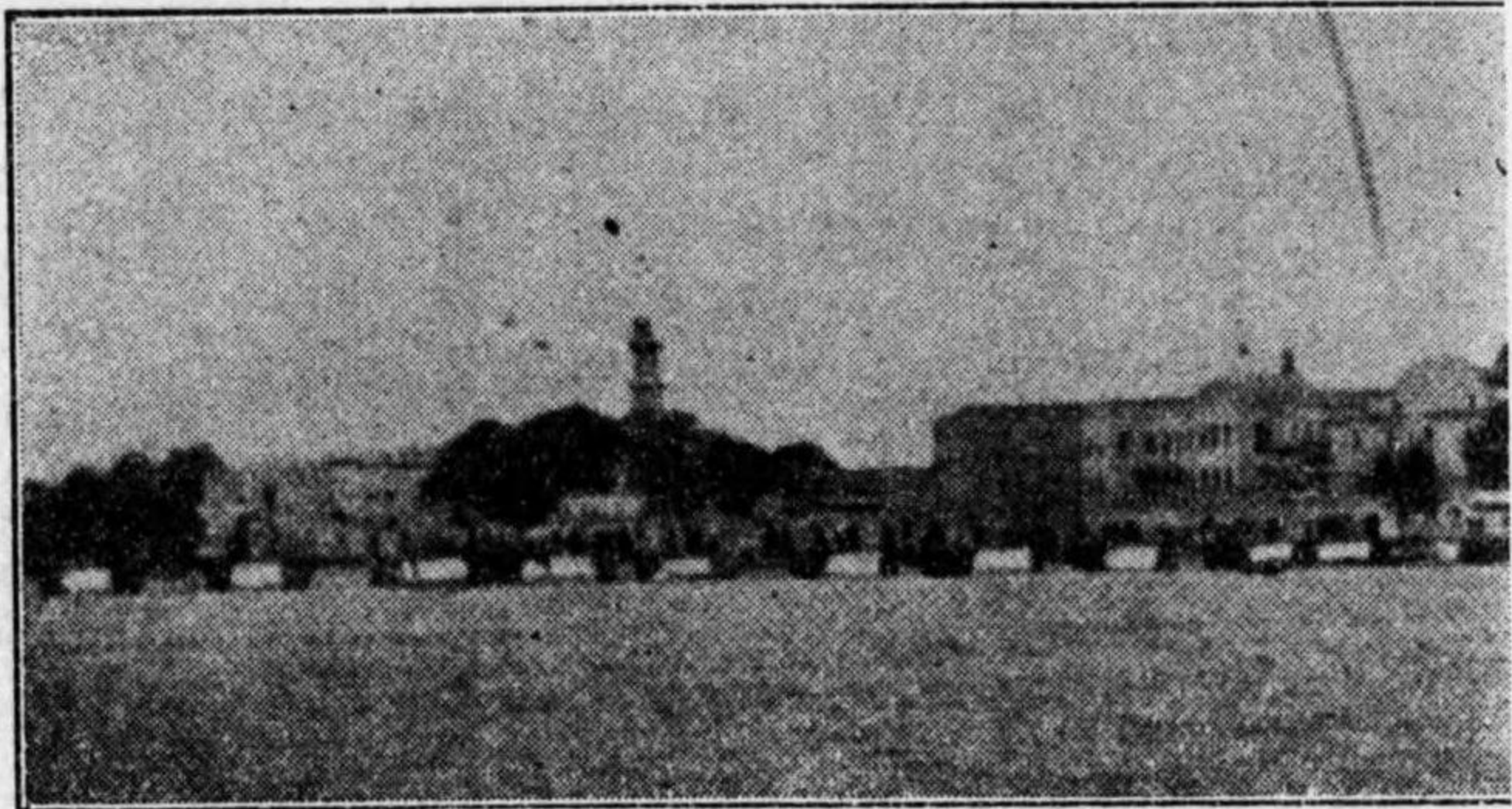
年度	歳入	歳出	歳入不足
一九〇九年度	二五、〇七九、〇六二	三〇、五三九、五四五	五、四六〇、四八三
一九一〇年度	二六、〇一五、一〇一	三二、九九七、七七二	六、九八二、六七一
一九一一年度	二八、六一二、九七八	三五、〇〇七、四四六	六、三九四、四六八
一九一二年度	三〇、七一一、一五九	五七、一六四、四五〇	一六、四五六、二九一

此の不足を填補する爲に、新政府成立以後三年間に既に一千九百萬土磅以上の公債を發行した。(但し一九一〇年の内債及びその他の國債三百九十六萬土磅は之に算入せず) 而して別に國庫に入りたるものは「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」兩州の代償金三百九十六萬土磅と、廢帝アブド・ウル・ハミッドの金庫より沒收したる一百万土磅とであるが、此の兩者を合せるも一年の不足額を填補する事が出来ぬ。それ故先年獨逸より購入した二隻の軍艦の如きも、廢帝の所有して居た財寶を



中世のダグダド (一)

賣却して漸くその代價を支拂つたと云ふ程である。歳出中の第一位を占むるものは陸海軍費であるが、銃器彈藥を始めとして殆ど有らゆる武装材料は之を外國より仰ぐのであるから、その費用の非常に高まるのも無理もない次第である。それに又青年土耳其黨は只管利權回收に熱注し、一方軍人側の人望を收攬するに努めて居るから、その全力を陸海軍の擴張に注ぎ、之が爲には金錢を惜まぬのである。今一九一二年度の豫算に就て見るに、歳出五千七百十六萬土磅の内、陸軍費が二千六百六十萬土、磅海軍費が六百四十萬土磅合計二千八百萬土磅の多額を示し



中世のダグダド (二)

て居る。之を警察及び憲兵費の二百四十萬土磅を加ふれば三千萬土磅を超過するのであるが、之に反して教育機關の文部省費は僅かに一百十四萬土磅で、農商務省の如きは實に四十八萬土磅に過ぎぬのである。之に據るも全くその權衡を失して居ることが明かである。右の陸海軍費に次で最多額を占めて居るものは國債の利子及び償還費で、一千五百七十九萬土磅である。そこで烏渡土耳其の國債に就て述べ様が、土耳其は世界に有名なる借金國で已に一八七五年に外債が二億二千三百英磅に達し、殆んど政府は破産に傾

き、遂に利子の支拂を停止するに至つた。其の後到底土國政府に於て償還の見込が立たぬ所から、一八八一年英、佛、獨、埃、伊及び土の債主代表者が國際整理委員會なるものをば君府に設立して、各國債の利率を引下げ、土耳其屬邦の貢金と煙草税より積立てたる償還費金とを債主に分配することとし、その結果國債總額を一億六百四十三萬英磅に減少した。

斯くて又一八八三年に煙草製造をば官營とし、向三十年間と期し埃、獨財團及び阿士曼銀行より成る一會社に請負はしめ、その代償として會社より毎年七十五萬土磅を國際整理委員會に支拂ひ、又殘餘の純益を右委員會と政府及び會社との間に分配することとした。此の結果大に財政の整理も行はれたが、一九〇八年の革命以來、前に述べたる如く、年々歲入の不足を告ぐると同時に、戰亂相次で起りたる爲め、再び國債の膨脹を來たし、昨年春四月に於ては、

外債 一三二、二七八、一三七土磅

内債 三四、四九四、三一土磅

總計 一六六、七七二、四四九土磅

を計上し、此の外土國政府が年々支拂ふべき鐵道保證金總額は一百八十四萬八千土磅に達して居る。而して右の外、外債中國際整理委員會の手に依りて整理せられつゝある額は、僅に五千萬土磅に過ぎぬのである。

然るに又巴爾幹戰爭の爲めに土耳其政府の支出したる戰費は三千三百萬英磅を下らぬのであるが、之が爲に國庫は殆んど空乏の極に達し、文武官吏及び兵卒の俸給給料は勿論、恩給、扶助料等の支拂は三四ヶ月も停滯し、已を得ず租税の一分を前取りにして、やつとその窮乏を逃れた様な始末である。その後小亞細亞に於ける鐵道布設權の代償として佛國より外債を募るとし、或は又獨逸と借款の約

を結びて戦後の善後策を講じつゝあつたのであるが、兎に角土耳其の貧弱國にして約一億七千萬土磅、即ち邦貨の十六億萬圓に達する巨額の負債を有して居ると云ふことは驚くべき事實である。今や又土耳其は自ら進んで歐洲禍亂の渦中に投じ、その結果益々財政の困難を極め、是非共巨額の外債を起さねばならぬのであるが、之に對して土耳其の政治家には如何なる成算があるのであらうか、單に此の點のみに就て考ふるも、吾人は土耳其の前途の爲めに杞憂の念を禁じ得ぬのである。

### 三 地方制度

土耳其の地方制度は全國をば州(ヴィラエツト)縣(サンジャック)郡(カザ)町(ナヒーエ)或はカリーエ)村(マハルリエー)に區劃し、州の長官をばヴァリ即ち總

督と稱し、皇帝の親任官であつて州内に於ける一切の行政を統監して居る。その下に副總督があつて、又書記官長、財務部長、法務部長、學務部長、勸業部長、警察部長等の行政官吏を有し、イダレエー・メジリスと名づくる行政會議なるものを置き、その決議案は州の法律として實施せらるゝのである。此の外州會なるものがあつて、毎年一回之を開く規定になつて居るも、此迄之に重きを置かず、開會せらるゝことが極めて稀であつた。

各州は二乃至三の縣に區分せられ、その長官をムテサリフ即ち縣知事と呼び、中央政府に依りて任命せられ、總督の隸下に屬して居る。その部下の重なる官吏をムハサバチと稱し、主として財務を司どつて居る。又州と同様の行政會議を有して居る。

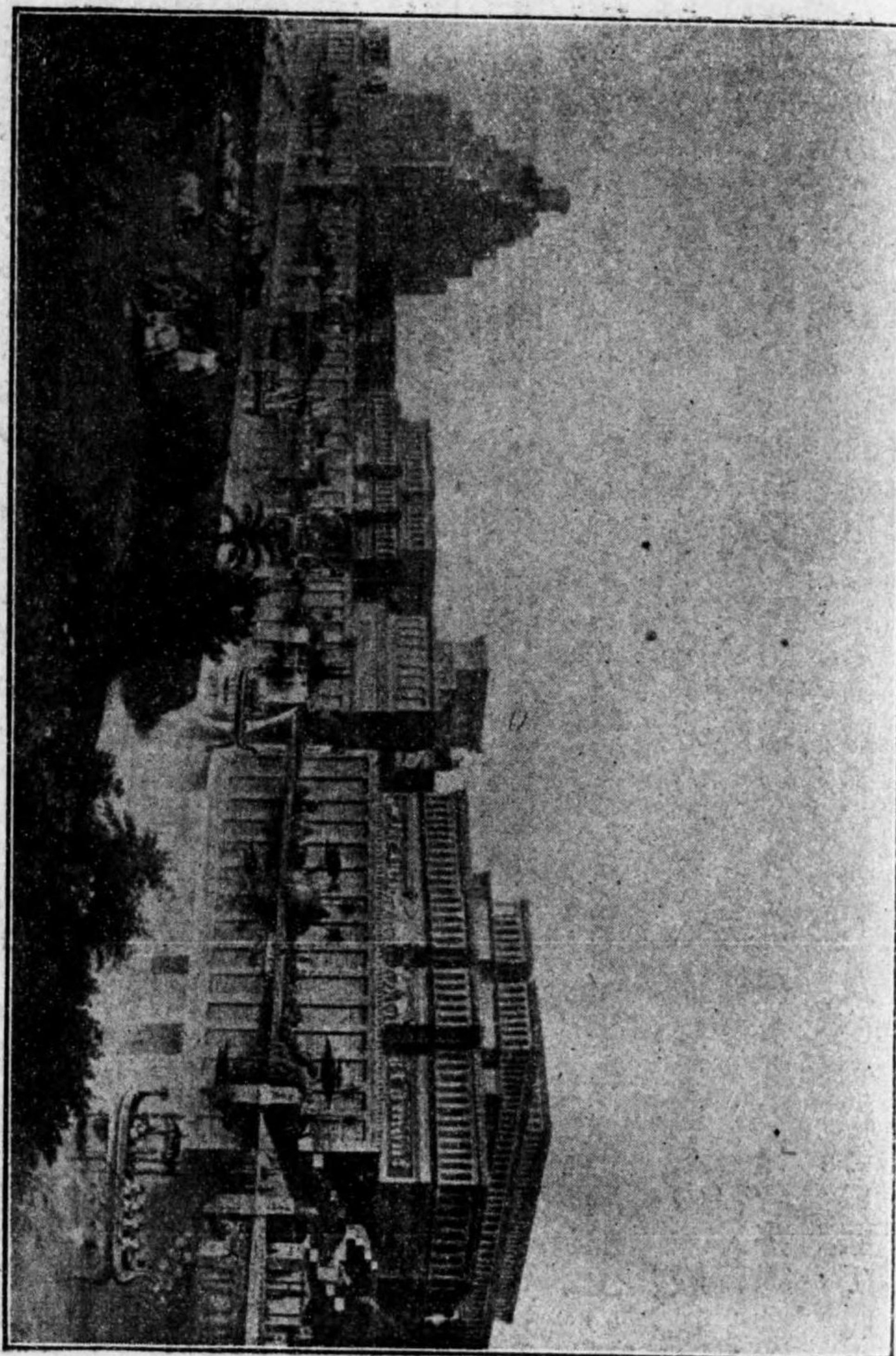
縣は又三乃至六の郡を有し、その長官をカイカマム即ち郡長と呼び、此亦政府

の任命に依り、縣知事の監督の下に立つて居る。一郡内には三乃至四の町があるが、町長をムヂヤールと稱するのである。村とは四五十戸の戸數を有する小部落を稱するのであるが、各村にはムクフタールと稱して、村民の推選に依りて行政の任に當るものが二名ある。又各町村にはイクタール・メヂレーと名づくる土着の長老より成る會議があつて、その決議がその町村に於ける行政上の基礎となるのである。

此の外ベグヂーと稱する原野の開拓に従事する官吏と、コルヂーと名づくる山林の監督官とがある。

#### 四 司法制度

土耳其の司法は行政より獨立しては居るが、又一種特別である。即ち各町村に



は長老會議が主として争論の和解や裁判上の事件を司どり、各郡には裁判長と二名の検事より成るベダエット・マフカメエーと稱する初審裁判所がある。而して右の検事は必ず一名は回教徒で他の一名は非回教徒と定めてある。各縣にては右の初審裁判所が民事と刑事とに分れて居て、各州にはイステナフ・マフカメエーと名づくる控訴院がある。又首府の君府には大審院がある。

土國の一般民法はナポレオン法典に基づきて作られたるものであつて、回教徒並に基督教徒たる土國臣民に對して均しく之を適用するのであるが、別に宗教上の法律即ちシエリなるものがあつて、その裁判官をばカヂーと呼び、回教上の舊慣特に寺院の不動産等に關する訴訟を判決するのである。而して前者の一般民法に據る裁判所は司法大臣の隸下に立つも、後者のシエリに據るものは教務總監の監督下にあるのである。又基督教臣民はその婚姻、離婚、及び相續等に就て特別の

裁判所を有することを許されて居る。

更に又土耳其に在住する外國人に對しては、カピチュラシオンと稱して古く希臘帝國時代より君府に遺つて居る治外法權なるものがある。之に依り凡て外國人は領事裁判權を有して居て、その事件が土國の臣民に關せぬ限りは、自國の領事裁判に依りて判決し、土國臣民との間の訴訟は土國の法廷に於て關係國の領事より譯官即ちドラゴマンを陪席せしめて其裁判の合法なるや否やを檢せしむるのである。

然るに此のカピチュラシオンなるものは唯裁判上の事ばかりでなく、之に據りて外國人は總て租税を免除せられて居るのであつて、又海關税の如きも條約國の協贊を経なければ容易に之を高めることが出來ぬのである。是は土耳其に取り總ての點に於て非常なる不利益であるので、青年土耳其黨は極力此の撤去を試みたが、獨逸は同意を表したが他の列強特に英國の如きは之に反對して容易に應ずる



の氣色が無い。そこで土耳其政府は此度の歐洲戰亂に乗じてその撤去を宣言したが、三國協商側は之を不法として承認しなかつた。是を遂に土耳其が獨塊に與みして起つに至つた一つの原因である。

### 第五編 結 論

#### 一 日本と土耳其

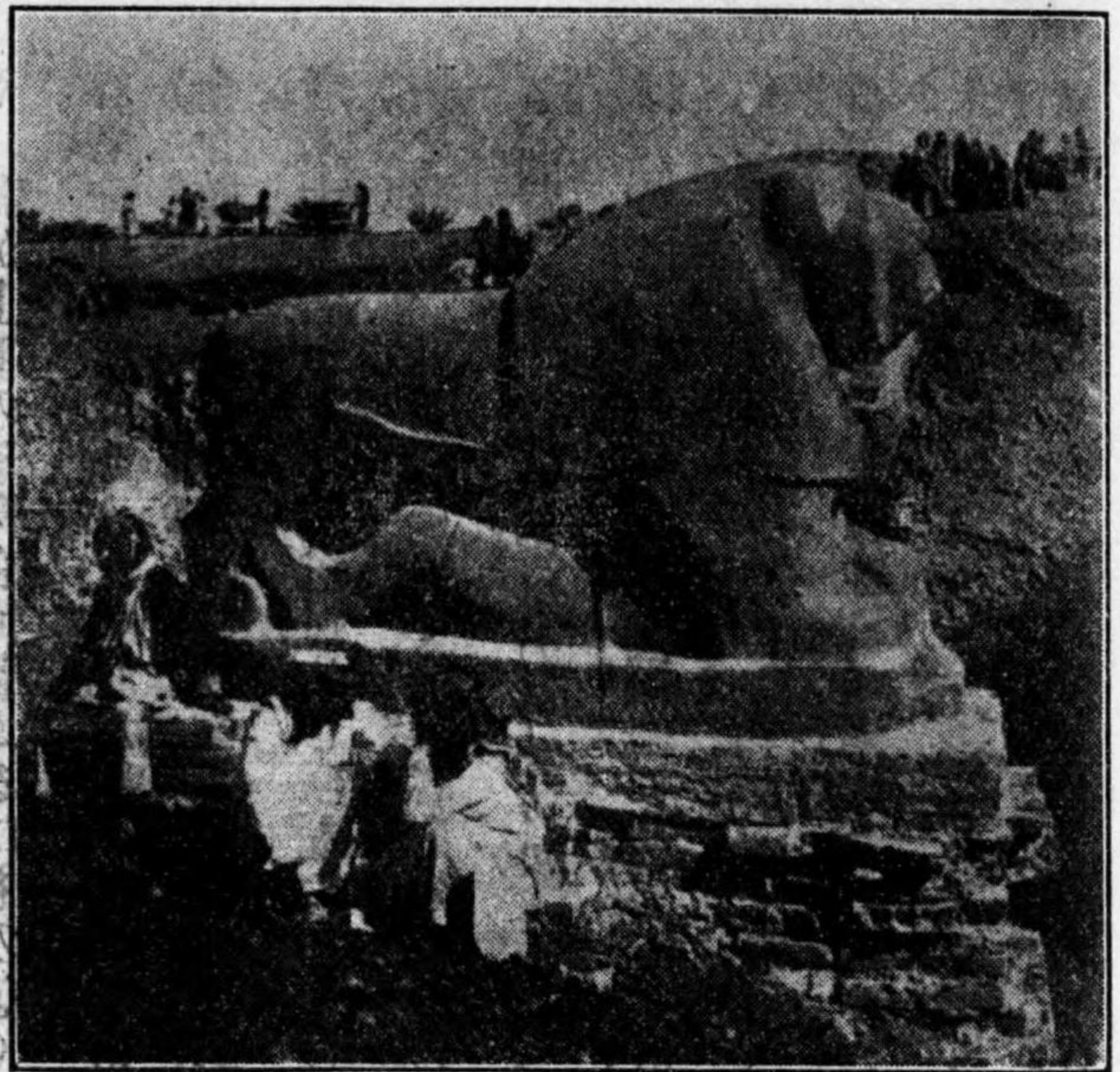
吾人は結論として土耳其と日本との關係に就て述べ様と思ふが、それには先づ日土交通上深き關係のある山田寅次郎氏が物したる『土耳其畫觀』中の卷尾にある追憶録の一節を紹介する必要がある。

『往古は兎に角、近時日土の交通が始めて開かるゝる至つたのは、實に明治二十三

年土耳其軍艦エルトグロール號の來訪以後である。當時土帝アブド・ウル・ハミッド二世は、遙に交りを我が東方の新興國に訂せんと欲して、海軍少將エミン・オスマン・パシヤを使節とし、特に前記の軍艦を派して萬里我が國を訪問せしめたのである。同艦は六千餘噸の大艦であつて、乗組員はオスマン・パシヤ以下六百五十人地中海より蘇西を経、印度洋を過ぎて我が國の横濱港に到着したるは同年六月七日の事であつた。斯くて敬意を我が帝室に表したるに、我が皇帝陛下も亦之に殊遇を賜ひ、土耳其の使節が滯留數ヶ月の後、歸途に上りしは同年の九月十五日であつた。然るに當時天候が甚だ穩かならず、我が近海の風濤殊に險惡を極めた。すると土耳其の軍艦は紀州灘を過ぐるに當りて、不幸にも覆没の厄に遭遇した。』

山田氏はその當時の實況を詳しく記載せられて居るが、その大要をつまんで言

ふと、我が海軍省は此の時急報に接するや否や、直ちに八重山艦をして遭難地に急航せしめ、村民の出せる數十艘の救助船と力を合せて死體の搜索に怠らなかつた。然るに土艦沈没の地點は陸地を距つると僅かに三十間、岩礁林立の間に在りて静穩の日でも容易に近づくとの出来ぬ處であつたので、捜海の困難一方ならなかつた。漸くにして二十一日迄に死體百二十一を收容し、艦長アリーペーも亦發見せられたが、憐れや司令官オスマン・パシヤの遺骸は遂に得ることが出来なかつた。斯くてその死體をば檜野崎燈臺を距つると遠からぬ高燥開豁の地を選びて埋葬し、その後その傍らに高さ一丈二尺幅三尺九寸の一大石碑を建て、徳川茂承侯が『土國軍艦遭難之碑』の八字を題せられ、知事石井忠亮氏が碑文を録せられたのである。之より先き前記檜野崎燈臺附近の村民は、遭難者六十九名を救助して大島の蓮生寺に收容し、其の中の士官ハイダル・ベイと樂長イスマイル・エンフエンデーと



蹟古のソロビバ

を防長丸の幸便に託し、村役場員と巡查とを附して神戸港に送り兵庫縣に實況を具申して救護上の打合を爲さしめた。すると九月二十日午前七時に獨逸軍艦ヴオルフ號が兵庫縣外事課員を便乗せしめて大島に入港し、郡長と協議の上遭難者を搭載して神戸に回航した。次に山田氏は左の如く記載して居る。

『土艦遭難の悲報一たび傳はる

や、我が上下の驚愕哀悼譬ふるにもなく、畏れ多くも 皇后陛下には特に生存者一同にフランネルの病床服を御下賜あり、尋いで朝野の士人は競うて義捐金を醸出して遭難者の遺族を慰問し、海軍省は比叡、金剛の二艦に命じて生存者六十九名を土都に送還せしむることとした。斯くて二艦は同年十月五日品川灣を發し、神戸港に於て遭難者を分乗せしめ、十二月十八日ポルトサイドを過ぎ、同月二十六日地中海のベシカ灣に入り、茲に土艦ターサー號の來迎ふるに逢ふたので、遭難者一同を同艦に引渡し、直ちにスミルナ港に赴きて土帝の命を待つた。蓋しダルダネルス海峽はクリミヤ戰爭後、列國會議の結果特に土帝の許可あるに非ざれば他國の軍艦を出入せしむるとが出来ぬからである。すると土帝は海軍少將ハツキー・パシヤに勅令し、電報を以て我が二艦に君府回航を請はしめ給ふたので、二艦は其命を拜して直ちにダルダネルス海峽に向ひ、ター

サー號とチャナカラ(海峽中の一港)に會し、同艦の先導にて翌明治二十四年一月二日、土京金角江口に安着した。斯くて土帝はドルマバクチエ宮殿を以て我が艦員の接待所に充てられ、比叡艦長田中大佐(少將)金剛艦長(軍大將)以下士官水兵に至るまでも、連日の饗應あり、兩艦長はメジテヤ二等勳章を贈與せられ、又土帝の御紋章を無数のダイヤモンドにて現はしたる純金製巻煙草入の御下賜あり、土京の歡待一月餘の後、兩艦は二月十日を以て辭し、歸途希臘のピレオ港を経て、同年五月十日無事品川灣に歸航した。』

山田氏はその翌年土京に赴かれたのであるが、非常に土帝并に同國政府の歡迎を受けられ數年間滯留せられ、中村氏と共に日土貿易上に多大なる功勞を奏せられたるは人の善く知る所である。

閑話休題前記土帝アブド・ウル・ハミッドが殊に軍艦を派して我が皇室を訪問せしめたるの眞意は、甚だ不明であるが、吾人の聞知する所を以てするば、我が國と修交條約を結ばんとするに在つたことは勿論であるが、尙それよりも進んで同盟をも結ばうと云ふ意志があつたらしいのである。然るにその後何等此の事に關して公然の交渉もなく過ぎ去つたことは、甚だ不可思議に感じられるのである。尤も條約締結の事は間接に交渉もあつた様であるが、どうやら土耳其は例のカピチュラシオンの撤去をその條件として貰ひたいと言ふので、我が當局者も躊躇したたのであると傳聞して居る。

そは兎に角事實に於て土耳其と我國とは今尙互に無條約國であるが、吾輩は平素頗る之を遺憾として居るのである。國際上別に土耳其と條約を結ぶ必要があるか無いかは別問題とし、貿易上に於ては確かに土耳其は我が國に取り有利なる關



蹟古のソロビバ

係を有して居ると信ずるのである。然るに通商條約のなきが爲めに、見す／＼その利益を放棄して居ると云ふことは、我が國の海外貿易策上に於ける一大缺陷であると思ふ。遺憾ながら我輩は經濟上の實際問題に對しては門外漢ではあるが、先年バグダッドに滞留中、同市の商人二三名が英國總領事館を通じて我輩に日本と直接の取引をしたいが、信用すべき貿易商の名を知らせて呉れと頼んで来た。仍つて我輩は三井物産會社を指名してやつた。するとその後その商人が英國領事館の通譯を連れて来て、頻りに日本と直接の取引をすることが相互に取りて非常に有利なることを説き、日露戦争後日本の雜貨が當地并に波斯にも著しく賣れる様になつて来たが、何分にも印度から之を取り寄せねばならぬので、第一不便である上に價格も高くなるので困るのである。それ故是非直接に取引をしたいのであると語つた。それから又、バストラ港でもその通り話したものがあつたので、

我輩は印度の孟買に着いた時に郵船會社の支店長にその話をすると、自分もとくからその事は考へて居るのである。現に孟買よりバストラ港までは僅かに七日航路であるから、我が汽船を回送せしむることも容易なのである。されど何を言つても未だ土耳其とは無條約國でもあるし、それに日本の商人もバグダッド方面に往つて居らぬ様なことであるから、残念ながら急に實行が出来ぬ。されど無論有利なのに相違ないとの返答であつた。

又是より先きにモスールに往つた時にも、日露戦争中に同地から盛んに羊毛を英國商人の手を経て、日本に輸出したとの事を聞いたのである。それに又現に我が專賣局は、歐洲土耳其からは少からず煙草の原料を仰いで居るのである。されば輸出入品共に土耳其は我が國に取り、有望なる貿易國として觀ることが出来るのである。

そこで我輩は、今回の歐洲戰亂の結果、土耳其の前途が果してどうなるであらうか、之を今日に於て豫想することは出来ぬが、土耳其を滅亡せしむることは何れの點から見ても、我が國に取りて決して利益で無いと思ふ。よしや西力東漸の防波堤たらしむることは最早不可能であるとするも、せめて我が經濟上の新發展地として生存せしむるの必要があると言ふのを、最後の結論として本編を終るのである。

土耳其及土耳其人終

終

